

樗牛の生活観——三十章

□貧しきものよ、憂ふる勿れ。望を失へるものよ、悲む勿れ。王國は常に爾の胸に在り。而して爾をして福音を解せしむるものは、美的生活是れ也。(樗牛全集四卷)

□大なる國民は利巧に非ずして剛毅なり。生意氣に非ずして愚直なり。(同)

□大なる國民は英雄崇拜の穉氣を要す。(同)

□吾人に三つの理想あり。一に曰く完全なる生慾。二に曰く安眠。三に曰く平和。唯是れのみ。(同)

□性慾の發動の醇なるものは、眞にこれ天下の至美、人生の至樂也。

(同)

□性慾の動くところ、野には春色あり、空には妙光あり、人には愛情あり。天地と人生と茲に初めて美なるを得。(同)

□性慾の美は其の飽足せられたる所に在らずして、それを憧憬するところに存すべし。(同)

□吾等自然の兒の關はる處は價值也。名目に非ざる也。(同)

□人生は事實也。空理に非ざる也。(二卷)

□一切の事物は人の爲めに存す。人物の爲めに存するに非ず。(同)

□理想は吾人に命と望とを與へて吾人を不滅ならしむ。(四卷)

□よしや太陽は漸く其熱度を減じ、此世界は早晚冷却し、あらゆる

生物の全く絶滅するの期ありとするも、希臘の文化は無益に非ず。沙翁の戯曲は不用に非ず。人生は決して虚無に非ざる也。(同)

□今の人成敗を重じて節義を輕んず。其立つや則ち名利、其行ふや即ち逢迎、所謂人物の高下は其志す所の名利の大小にあり。(同)

□今の士人は才を負ひて徳を稱せず。却て成敗を以て是非を辯ぜむと欲す。是を以て千計萬策、要は利慾を出でず。(同)

□饑ゑたるものは食を見て顔を背け、人は其路に仆るゝを義しと稱ふ。(二卷)

□富は權利を産み、權利は實益を收む。残る所の名や即ち自由と平等のみ。されど形式主義の弊や、尙ほ是の空名によりて正義を説く。(同)

□今や、人々自ら其獨りを喜びぬ。友は彼に要なき也。彼は利害に非ざれば動かず、世は是を直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かずむば飽かざる也。(四卷)

□金錢は、今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝妓も、其報酬は金錢也。(同)

□金錢は官吏を奴隸にし、貴族と富豪とを木偶にし、慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。(同)

□快樂は金錢によりて計られ、名譽も、徳義も金錢によりて賣買せられむとす。賭博は彼等が唯一の遊戯なり。(同)

□今や虚榮を誇るの風は凡ての社會に浸潤せり。富めるものは其富の人に知られざらむことを是れ憂へ、富まざる者は、其の富まざ

ることの人に知られんことを是れ恐る。金錢は凡ての物に單位となれり。美、品位、威嚴、凡て是れ等のものは、金錢の多寡によりて秤量し得ざるはなし。(四卷)

□ 憫むべきは饑ゑたる人に非ずして、麩麩の外に糧なき人のみ。人性本然の要求の満足せられたるところ、其處には乞食の生活にも帝王の羨むべき樂地ありて存する也。(同)

□ 悲しきは貧しき人に非ずして富貴の外に價値を解せざる人のみ。(同)

□ 傷むべきは生命を思はずして糧を思ひ、身體を憂へずして衣を憂ふる人のみ。彼れは生まれて其爲すべきことを知らざる也。(同)

□ 此生の憂苦を免るゝ道、たゞ三つあり。永き戀か、早き死か、然

らざれば狂。(同)

□ 名其死と共に滅するも、死後千年を経て亡ぶるも、其終りあるに至つては一なり。(同)

□ 功名朝露の如し。(同)

□ 搖籃を天地とせる嬰兒には、望みはめぐれる獨樂の中にありなむ。(五卷)

□ 身自ら創造者に非ざるよりは、誰か好く善と惡とを辨へむや。(同)

□ 人生の目的を造り、此世に意義と未來とを與ふるもの、彼をこそ創造者とは名づくるなれ。物の善きと惡きとの事實を造らむものは唯彼にも能くせむのみ。(同)

漱石の人間観——二十三章

- 人間の定義と云ふと外に何にもない。只入らざる事を捏造して自ら苦しんで居る者だと云へばそれで充分だ。(吾輩は猫である)
- 個人の革命は今既に日夜起りつゝある。北歐の偉人イブセンは、此革命の起るべき状態に就て具さに其例證を吾人に與へた。(草枕)
- 人間は無能力である。(虞美人草)
- 人間は吾身が怖い悪黨であるといふ事實を徹骨徹髓に感じたものでないと苦勞人とは云へない。苦勞人でないと到底解脱は出来ない。(吾輩は猫である)

- 人間は好きで働くものだ。論法で働くものぢやない。(坊っちゃん)
- 世の中に分らない人程危険なものはない。(それから)
- 世の中では萬事積極的のものが人から真似らるゝ權利を有して居る。(吾輩は猫である)
- 偉い人も偉くない人も、社會へ頭を出した順序が違ふ丈だ。(三四郎)
- 世の中を見渡すと無能無才の小人程いやにのさばり出て、柄にもない官職に登りたがるものだ。(吾輩は猫である)
- 元來人間といふものは、自己の力量に慢じて皆んな増長して居る。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらなくては、此先どこ迄増長するが分らない。(同)
- 議論のいゝ人が善人とはさまらない。遣りこめられる方が悪人と

は限らない(坊っちゃん)

- 人間は誰でもいざといふ間に悪人になる。(同)
- 金を見るとどんな君子でも直ぐ悪人になる。(同)
- 十人が十人の因果を有つ。(虞美人草)
- 通例の人はいざと云ふ間際になつて又思ひ返す。(吾輩は猫である)
- 人間は日本橋の真中に臓腑をさらけ出して恥かしくない様になければ修業を積んだとは云はれん。(章枕)
- 人は自分の有つてる才能を出来るだけ働かせなくちや嘘だ。(心)
- 人間は自分が困らない程度内で、成るべく人に親切がして見たいものだ。(三四郎)
- 人間は只眼前の習慣に迷はされて、根本の源理を忘れるものだ。

(吾輩は猫である)

- 人間は利口な様だが、習慣に迷つて根本を忘れると云ふ大弱點がある。(同)
- 眠氣を催す様な人間は何處か尊い處がある。(虞美人草)
- 禿を自慢にするものは老人に限る。(三四郎)
- 人は眼を閉つて苦い物を呑む。(同)

樗牛の人間觀——二十二章

- 人間は不完全なる動物也。(樗牛全集二卷)
- 人生は多幸なり。何となれば多望なれば也。進歩と自由と活動とに於て、人生は其唯一の幸福を發見すべければなり。(四卷)
- 人は多く世を背き、世は多く人と違ふ。(二卷)
- 人は素より世を離れて幸なる能はず。(同)
- 人は其心に信ずる處のもの、外は何事も信ずる能はざる也。(四卷)
- 一面の人は唯一面の人を見る。(同)
- 人心は偏し易し。(同)

- 人耕作の故に生蟲を殺すを顧みず。(三卷)
- 人は其の「人」たる力と性とによりて初めて尙ばる。(二卷)
- 人は祭りをだに營まずなりぬ。神は其費えに報いざれば也。(四卷)
- 多くの人は己れの立てる處を知らず、何處に自らの心を求むべきやも覺らざる也。(同)
- 個人はたゞ一個の頭顱を有するの外に何等の價值をも認められざる也。(同)
- 口もて言ふ望み、魂にのみ夢みる吾等こそ果敢なけれ。(五卷)
- 天才は豫告の後に來るものに非ざる也。(二卷)
- 天才は狂し俗物は笑ふ。(四卷)
- 世に凡人の數幾十百千萬億ありとするも、人類に於て何の益する

處ぞ。願くば彼等の十萬を割いて一パイロンを得む、願くば彼等の一百萬を割いて一奈破翁を得む。我に一日蓮を與ふるものあらば、願くば代ふるに一千萬の凡人を以てせむ。我に一釋迦を與ふるものあらば、一億萬亦惜むに足ざらむ。(同)

□人よ怪む勿れ、彼の木偶を禱るもの、猶且つ犠牲を供ふるに非ずや。天才にして得らるべくんば、如何なる犠牲も決して貴からざる也。(同)

□吾人の世界より天才を除き去れよ、残る所果して何物ぞ。歴史は空虚とならむ。世界は暗黒とならむ。人生は寂寞たらむ。(同)

□天才は正しく社會の名譽也。國家の寶冠也。人類の光明也。(同)

□吾人が天才を歎美するのは、吾人の精神的生活を豊富にし、是に

よりて自ら慰め、自ら勵み、かねて此の世に處する安立の地盤を求むるにあるのだ。俗學者流の生活する世界以上に於て、吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前路によりて少からず確かめられ、且勵まざるのだ。吾人は希望によりて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を堅むるのだ。(同)

□偉人と凡人との別は一言にして盡すべきのみ。彼は人生を簡單にする者也。此は人生を複雑にするもの也。(同)

□自然の兒には常に兩面の刃あり。(同)

蘆花の人間観——四十九章

- 人は未だ半身獸たるを脱せず。(巡禮紀行)
- 己が造つた型に囚はれ易いのが人の弱點である。(みずのたはこと)
- 人間は實に淺つばいもので、極く皮相で人を判断して了ふ。(思出の記)
- 人に明日を卜するの明なし。(寄生木)
- 我強き人の性質として、或方には人の思はくも思はず、吾思ふままに遣り通すことあれど、また思ひの外に脆くて、人評判を氣にかねるものなり。(不如歸)

- 名と利と併せ收めて好きな事をする上に、人によく思はれんとするは我儘者の常なり。斯る人に限つておのづから諂諛を喜ぶ。(同)
- 人間誰か多少俳優の質を帯びざる。(青山白雲)
- 人の心ほど貴いものはない。(寄生木)
- 人間と云ふものは、千難萬辛に處して、不屈不撓なのが遂に傑くなるのだ。一定一變の確乎不拔の志操が貴いのだ。(同)
- 人間は精神が肝腎、精神の腐つた人間は駄目だ。(同)
- 男子の貴ぶは精神氣概だ。(同)
- 或人の氣分に於ては、往々にして光と蔭の干満を見る事ある也。(青山白雲)
- 氣象者は氣象で却つて失策ります。(思出の記)

- 人の運命は已に胎内にありて定まる。(黒潮)
- 人間萬事運命の支配を受けねばならぬ。(寄生木)
- 人類は天に定られつゝある日課表を踏み行ふものである。(同)
- 誰にでも其人相應の生き様があります。また其人相應の死に様があります。(みずのたはこと)
- 人間として衝突は自然の約束であります。(同)
- 人間は一寸したはづみで善くも悪くもなる。(自然と人生)
- 人間は眞面目な程確かなものはない。(寄生木)
- 人は馬鹿な眞似をして、其馬鹿の境域を脱去する或一時期なくんばこれ亦眞の大馬鹿者。(同)
- 人間も我慢の強い動物だ。(同)

- 人間は醫師の云ふ程弱いものぢやありません。(不如歸)
- 百萬圓有つても乞食根性がのぬ者もある。(自然と人生)
- 人は石を玉と握ることもあれば、玉を石と抛つ場合もあります。(みずのたはこと)
- 不幸の天地に不幸の人間と生れし者、何れか情の子にあらざる。何れか迷ひの兒にあらざる可き。(青山自雲)
- 所詮割の合はぬは、此自在の大宇宙に情と云ふものを持つて生れた人生の上であらう。(黒潮)
- 人は何時までも泣くものでない。また人はいつ迄も笑つてばかり居る者でない。(寄生木)
- 總じて人は自己の影を他人に見るものだ。(みずのたはこと)

□蛇の如く踏み殺しても容易に死なぬ者あれば、莖の花にも似て、いたはり育て、稍もすれば萎れ行く人もあり、光と陰とある如く人にも之あり。(同)

□若し搖籃を搖がす者は即ち天下を搖がすならば、學校を握る者は社會の牛耳を握るのである。(思出の記)

□男と云ふものは薄のろい狂氣じみた、弱く出れば強くなり、強く出ればべらりとなる動物である。(黒潮)

□君子は義に喻り、下戸は甘きに喻る。(青蘆集)

□名士など、云ふものは、霞を隔て、遠くから拜む方が餘程有難い。(思出の記)

□名士など、云ふ者は、すぐれた長所がある丈短所も亦往々甚だし

きもの。これを知らずにうつかり見て眞黒に惚れ込むと、案外な短所を見せられた時、打殺したい程嫌になる。(同)

□天才は必ず己を主張せずには居らぬ。押しまげられても磁石の鍼は北を指す様に、天賦の能力は必ず一度はあらはれて来る。(思出の記)

□伸びんくとする幼な心は、譬へば春の若葉の如し。假令一度雪に降られしとて蹂躪だにせられずば、自ら雪融けて青々とのぶるもの也。(不如歸)

□子供の時の習慣は移り易い。(思出の記)

□年少時代は馬車馬ではないが、傍目もふらず唯前へと進めば其で宜いので、後の事などは頓着する暇はない。(同)

- 御し易いのは青年、御し難いのも青年、要するに青年の呼吸を會すると否とにある。(同)
- 人生固に憂多し。青年殊に不平多し。(巡禮紀行)
- 青年に禁物は生温い空氣である。(思出の記)
- 青年は如何なる場合に於ても鮮明なる旗幟を喜ぶものである。熱帯に非ずんば極地を喜ぶのが即ち青年の本色だ。(同)
- 青年の氣血は奈何しても活動せずには居らぬ。(同)
- 青年時代には愛するも憎むも、兎角一圖になり易い。(同)
- 若い時には善惡共に一圖になる。(同)
- 若い時分は一寸した事でも、しみじみ身に浸みるもので、斯様な事から一生をだいなしにする事もあり兼ねぬ。(自然と人生)

- 年若な時分は浮標も同然、抑へ手がありませぬと直ぐぶくぶくと浮き立つて来る。(自然と人生)
- 若い者の樂みの一つは食ふ事である。(みずのたはこと)

獨歩の人間觀——五十二章

- 人は光なり。(欺かざるの記後篇)
- 人は人と天に對す。(同)
- 人と人との關係は人を小にす。人を盲となす。(同)
- 人間互に墮落す。然り互に墮落す。互に奴隸たり。互に束縛せられて知らざる也。(同)
- 人間を支配する者は人間也。(欺かざるの記前篇)
- 人間は人間を信ずる外は能はず。人間たるもの人間を呪ふ能はず。彼は人間なれば也。(同)

- 多くの人は自ら認めて人たりと爲す黙より、寧ろ無意識に人たる者を有す。(同)
- 人は自ら小にする也。見よ詩人よ哲人よ。彼如何に大なる。其のエンブレースする處大なれば也。(同)
- 人は常に自由を欲し、而して常に束縛を受く。(同)
- 人間は過去の習慣、境遇、行掛り、場合の奴隸なる哉。(同)
- 人間は社會的分業の區別よりも一層大なる者也。(同)
- 人間は自然中の最も自然なる者也。(同)
- 「自然」ア、實に不思議也。されど「人間」、人間に取りては實に人間程不思議なる者はあらじ。(同)
- 人は自由の兒、自然の兒也。(後篇)

□人は新しき見聞する處に迷ふと同時に、また久しく熟感する處に同化するもの也。(同)

□人はたゞ自家の習熟する處を以て人生唯一の事實となさんとす。(同)

□人動きて歴史出來、人考へて哲學生る。(同)

□世人の心、滔々として物の形と情と欲と、地の虚義とに迷溺す。(同)

□人は悉く主義の肉塊に過ぎず。(同)

□人間は利己の動物たるに過ぎず。(同)

□人は虚榮と我念との池に浮沈する芥に過ぎず。(同)

□自然は美にして誠なれども、人は利己的にして虚偽也。(同)

□人間は暗き性をもつ。人情は發達の中途に在り。宇宙は暗と光との戦也。人類は苦惱のうちに開發す。(同)

□人は社會と習慣とに囚はれざれば、如何なる事をなすも何等の恐怖ある事なし。(病床録)

□人は如何なる所にも宇宙を形造るもの也。(同)

□人間は愚也。何事も知る能はず。唯自ら惑ふ。(前篇)

□人は人の顔面をのみ見て自己の頭上を見ず。(後篇)

□智者は凡ての者を透かして事實を見る。(同)

□人には推理力の強きと、記憶力の強きと二種あり。概して推理の力勝ちたる人は記憶の力弱く、記憶の力發達したる人は推理の力劣れり。(病床録)

- 人は決して差異なし。(同)
- 天を見るに止まらず、地をも見るが人間の命運也。人間は靈のみに非ず、肉をも有す。宇宙は光のみに非ず、暗をも有す。(前篇)
- 人間の運命を支配する自然の法則の餘りに不可思議變妙なる。實に人をして絶望せしむるに足る也。人は恐らくは己を支配する法則の百分の一をも知らざる可し。(同)
- 人は己れの欲する所、尤も適する處に適く能はず。(同)
- 氣に活きる人あり、血に活きる人あり。時に或は骨に活きる人あり。夢に活きる人あり。(病床録)
- 世間には損な人と得な人とあり。得な人となるは不快なり。損な人となるも不快なり。(同)

- 世には終生中幕役者として終る者あり。(同)
- 肉體のみの人を憐まざるを得ず。然るに人間悉く肉體を離る能はず——否吾より以外の肉體の負擔をも有する也。(前篇)
- 肉體にも全然従ふ能はず、さりとして精神にも全然従ふ能はざる者は不幸の人なり。寧ろ愚人なりとす。(同)
- 「人は肉體を有す」肉體を有する人の上に同情を以つて見ざる可からず。人情とは肉體と精神との持主なる幽音悲調なることを知らざる可からず。(同)
- 天才は決して、決して容易に知られざる也。(同)
- 天才の本體が凡衆に解せられたる日は神が人類の進歩を導き給ふ目的は達せられたる也。(同)

□天才を知り給ふ者は只だ神のみ。又天才の人のみ眞の神を知る。

見る、聞く、感ず、崇拜す、愛す。(同)

□嗚呼天才豈に知り易からんや。眞に天才の根本を解し能ふ者は又一個の天才也。(同)

□大人は自由の裡にすむ。超然は即ち自由の謂也。(同)

□自由と力と希望と、偉人の源はこれのみ。(後篇)

□眞の精神は眞の神に通ず。眞の精神これ哲人の精神にぞある。哲人英雄を學ぶとは此精神を學んで自家の精神をなすにあり。此精神は一つ。要するに神は一つ。(同)

□大人英雄、遠く望めば偉大なる如くなれども、其偉大なる所以を細かに察する時は、一日の爲せし處、一日中に思考せし思想、集

まりて一年の事業となり、十年の事業となり、一生の事業となるのみ。故に一日の経過は決して輕視すべからず。思ふに一日の経過を能く考究熟察する者は必ず大人英雄なるべし。何となれば彼は多くを知ればなり。(前篇)

□社會人心と社會事務との間に一定の法則ありて存す。一個人の勝手になる者に非ず。只哲人賢者英雄の士は此法則の奥妙深遠なる運行を看破し、此法則に従ひて事を成就す。(同)

□少壯者の命は空想ファンシーと驕氣プライドなり。(同)

□「少壯」思想に於て感情に於て人間一代の傳記生命の絶頂なり。回顧あり、夢想あり、喜悅あり、悲愁あり、忽ち歌ひ、忽ち泣き或る者は終に自殺を企て、或る者は遂に墮落の谷底に陥いる。大

人、哲人、聖賢、英雄等の少壯時代を見よ。カーライルは如何、ルーテルは如何、而して爾自らは如何。社會、宇宙、人間、生命、死、花、月、星、雨、悉く其新面目を來し、新解釋を求め來る。
(同)

□少壯時代は混沌時代也。光明と暗黒の戦ひ也。溶解時代也。大人も聖賢も、大宗教も大哲學も、大詩も大事業も、悉く此時代に定まる。此時代は溶解されたる金屬の如し。如何様にも鍛はれ如何様にも鑄らるゝ也。一時一分だも大切なる時間にして、時を經過し時を誤らば折角熱騰せる金鐵も遂に冷却して、又如何ともし難きに歸す。(同)

□人物を思はゞ、老成人のみを想像する勿れ。其人が小兒の時より

青年の時に至り、青年より壯年、壯年より而して老成に達し而して遂に此悠遠の自然に歸し去りたる其變化發達の模様事實について思ふべし。(後篇)

樗牛の人情觀——十三章

□人を幸ならしめんが爲めの知識は、今や却つて人を驅役し、勞死せしめずんば已まざらんとす。(樗牛全集二卷)

□『投げられたる石は行く所まで行かざるべからず、人は生まれて死ぬまで生きざるべからず』是れ最も正當にして最も男子らしく且つ最も危険なる思想也。(四卷)

□大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小ささを悟るは其の一つである。己れの大きいなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意により。彼れは攝受門、此は折伏

門、彼れは易行道、是れは難行道である。彼は釋迦、基督の教義にして、此は奈破翁、ニイチエの信條である。(同)

□人を脱して神となる。己れの小ささを悟る所以である。人のまゝにして神となる。己れの大きなを信ずる所以である。(同)

□『朝に道を聞いて夕に死するも可也』。是れ孔子の教なりき。『早く其杯を空しくせずや。其の泡の消ゆるに先ちて吾人の命の消えざること誰か保せしや』是れアナクレオンの歌なりき。吾人は思ふ。是れ人生に於ける二個の大きな事實にして、亦二個の最も大なる真理也。(同)

□流轉無常の萬物の中、獨り亡びざるものは真理のみ。(三卷)

□集まり成れるものは遂に壞るゝの時あるべし。唯真理のみ永遠渝

る事無し。(同)

□等しきものは等しきもの、母なり。(二卷)

□真理は裸かにも真理たるべし。(同)

□愚なる彼等はすべての物、人の如く詐り易からざるを知るに及び是世を憂きものと思ひなしても、尙ほその偽りを捨てむとはせざる也。(二卷)

□同じきもの、み同じき者を解す。(同)

□理の争ふべきもの、其事初めより争ふの要なき也。(四卷)

□本能の命ずる處、其處に人生の最も大いなる事實あり。(同)

漱石の人情観——六十七章

□全體人にからかふのは面白いものである。(吾輩は猫である)

□からかふと云ふ心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかはれる當人が平氣で濟まして居てはならん。第二からかふ者は勢力に於て人數に於て相手より強くなてはいかん。(同)

□からかふと齒をむき出して怒る。怒る事は怒るがこつちをどうする事も出来ないと言ふ安心のある時に愉快は非常に多いものである。(同)

□昔からからかふと云ふ娛樂に耽るものは人の氣を知らない馬鹿大

名の様な退屈の多い者、若くは自分のなぐさみ以外は考ふるに暇なき程頭の發達が幼稚で、しかも活氣の使ひ道に窮する少年かに限つて居る。次には自己の優勢な事を實地に證明するに最も簡便な方法である。人を殺したり人を傷けたり、又は人を陥れたりしても自己の優勢な事は證明出来る譯である。が是等は寧ろ殺したり傷けたり陥れたりするのが目的のときによるべき手段で、自己の優勢な事は此手段を遂行した後に必然の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくつてしかもこんな人に害を與へたくないと云ふ場合にはからかふのが一番御恰好である。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事實の上に證據だてられない。事實になつて出て來ないと頭のうちで安心して居

ても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃むものである。否、恃み難い場合でも恃みたいものである。夫だから自己は是丈恃める者だ、是なら安心だと云ふ事を人に對して實地に應用して見ないと氣が濟まない。しかも理窟のわからない俗物や、あまり自己が恃みになりさうもなくて落ち付きのない者は、あらゆる機會を利用して此證券を握らうとする。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものはどうか自分より弱い奴に只の一返でいゝから出逢つて見たい。素人でも構はないから抛げて見たいと至極危険な了見を抱いて町内をあるくも是が爲めである。(同)

□世の中に退屈ほど我慢の出來にくいものはない。何か活氣を刺戟

する事件がないと生きて居るのがつらいものだ。からかうと云ふのもつまり此刺戟を作つて遊ぶ一種の娛樂である。(同)

□ 退屈な時には髯の數さへ勘定して見たくなるものだ。(同)

□ 憐れは神の知らぬ情で、しかも神に最も近き人間の情である。(草枕)

□ 同情のある恐喝手段は長者の好んで年少に對して用ひる遊戲である。(虞美人草)

□ 弱蟲は親切なものだ。(坊っちゃん)

□ 人の親切は其當時にこそ餘計なお世話に見えるが、後になるともう一遍うるさく干渉して貰ひたい時機が來るものである。(それから)

□ 今の人は親切をしても自然をかいで居る。(吾輩は猫である)

□ 人間は自分だけを考へるべきではない。世の中もある。國家もある。少しは人の爲めに何かしなくては心持のわるいものだ。(それから)

□ 冷淡は人間の本來の性質であつて、其性質をかくさうと力めないので正直な人である。(吾輩は猫である)

□ 正直ですら拂底な世に、それ以上を豫期するのは馬琴の小説から志乃や小文吾が抜け出して向三軒兩隣へ八犬傳が引越した時でなくはあてにならない無理な注文である。(同)

□ 天下の人にはみんな泥棒根性がある。(同)

□ 愛嬌といふのは自分より強いものを斃す柔かい武器だ。(虞美人草)

□動かうとすればこそ愛嬌も必要になる。動けば反吐を吐くと知つた人間に愛嬌が入るものか。凡ての反吐は動くから吐くのだ。俗骨萬斛の反吐皆動の一字より来る。(同)

□人間の眼は平面上に二つ並んで居るので、左右を一時に見る事が出来んから、事物の半面丈しか視線内に這入らんのは氣の毒である。(吾輩は猫である)

□物象のみに使役せらるゝ俗人は五感の刺戟以外に何等の活動もないので、他を評價するのでも形骸以外に涉らんのは厄介である。何でも尻でも端折つて汗でも出さないと働いて居ない様に考へて居る。(同)

□達磨と云ふ坊さんは足の腐る迄坐禪をして澄まして居たと云ふが假令壁の隙から鳶が這ひ込んで大師の眼口を塞ぐ迄動かないにして、寝て居るんでも死んで居るんでもない。頭の中は常に活動して廓然無聖などゝ乙な理窟を考へ込んで居る。儒家にも静座の工夫と云ふのがある相だ。是だつて一室の中に閉居して安閑と梵の修業をするのではない。腦中の治力は人一倍熾に燃えて居る。只外見上は至極沈静湍肅の態であるから天下の凡眼は之等の知識巨匠を以て昏睡假死の庸人と見做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の聲を立てるのである。是等の凡眼は皆形を見て心を見ざる不見なる視覚を有して生れ付いた者である。(同)

□形體以外の活動を見能はざる者に向つて、己靈の光輝を見よと強ふるは、坊主に髪を結へと逼るが如く、鮪に演説をして見ろと云

ふが如く、電鐵に脱線を要求するが如きものである。(同)

□観ずる者を見ず。(虞美人草)

□芝居氣があると人の行爲を笑ふ事がある。うつくしき趣味を貫かんが爲めに不必要なる犠牲を敢へてするの人情に遠きを喘ふのである。自然にうつくしき性格を發揮する機會を待たずして無理矢理に自己の趣味觀を街ふの愚を笑ふのである。眞に個中の消息を解し得たるもの、喘ふは其意を得て居る。趣味の何物たるをも心得ぬ下司下郎のわが卑しき心根に比較して他を賤しむに至つては許し難い。(草枕)

□眞理に徹底しないものはとかく眼前の現象世界に束縛されて泡沫の夢幻を永久の事實と認定したがるものだから少し飛び離れた事

を云ふと直ぐ冗談にしてしまふ。(吾輩は猫である)

□普通と云ふと結構だが、普通の極平凡の堂に上り庸俗の室に入つたのは寧ろ惘然の至りだ。(同)

□蕎麥の延びたのと人間の間が抜けたのは、由來頼母しくないものだ。(同)

□人間も返事がうるさくなる位無精になるとどこことなく趣があるがこんな人に限つて女に好かれた試がない。(同)

□強情さへ張り通せば勝つた氣で居るうちに當人の人物としての相場は遙かに下落して仕舞ふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬ迄自分は面目を施した積りかなにかで其時以後人が輕蔑して相手にして呉れないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こん

な幸福を豚的幸福と名づけるのだ。(同)

□『今でも若いつもりですよ、可哀想に』『そんな事が男の前で云へればもう年寄りのうちです』(草枕)

□月傾いて山を慕ひ、人老いて妄りに道を説く。(虞美人草)

□昔の人は人に存するもの眸子より良きはなしと云つたさうだが、成程人焉ぞ瘦さんや。人間のうちに眼程活きて居る道具はない。

(草枕)

□烟たつて火あるを知り、眼濁つて愚なるを證す。(吾輩は猫である)

□疑へば己れにさへ欺かれる。況して己以外の人間の利害の衝に損失の塵除と被る面の厚さは容易には度られぬ。(虞美人草)

□御機嫌に逆らつた時は必ず人を以て詫を入れるのが世間である。

(同)

□利害を重んずる文明の民がさう輕卒に自分の損になる事を陳述する譯がない。(同)

□戀はうつくしかる、孝もうつくしかる、忠君愛國も結構だらう。

然し自身が其局に當れば利害の旋風に捲き込まれてうつくしき事にも結構な事にも目は眩んで仕舞ふ。(草枕)

□一人の男、一人の女も見様次第で如何様とも見立がつく。(同)

□嘆服と云ふ事と邪魔と云ふ事は時として兩立する場合がある。(吾輩は猫である)

□普通の同化には刺戟がある。刺戟があればこそ愉快である。(草枕)

□個人の嗜好はどうする事も出来ん。(同)

□かつて其人の膝に跪いたといふ記憶が今度は其人の頭の上に足を載せやうとする。(心)

□偉大なる活力の發現には此活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさう云ふ心配は伴はぬ。(草枕)

□ある状況の下に置かれた人間は、反對の方向に働き得る能力と權利とを有してゐる。(三四郎)

□愚にして賢と心得てゐるほど片腹いたい事はない。(虞美人草)

□天下何が面白いと云つて未だ食はざるものを食ひ、未だ見ざるものを見る程愉快はない。(吾輩は猫である)

□何が嫌ひだつて人に隠れて自分丈得をする程嫌な事はない。(坊っちゃん)

□凡そ何が氣障だつて思はせぶりの涙や、煩悶や、眞面目や、熱誠ほど氣障なものはない。(それから)

□人を見て無暗に笑ふものは必ず人に求むる所のある證據である。(虞美人草)

□腹を抱へて笑ふだの、轉げかへつて笑ふだのと云ふ奴に一人だつて實際笑つてる奴はない。(三四郎)

□吾々は時として理詰の虚言を吐かねばならぬのがある。(吾輩は猫である)

□自分の好いて居る人の悪口を殊更云つて見る事もある。(同)

□芝居に行つて自分の着てゐる羽織の紋の大きさが、時代か時代後れか、それ許りが氣になつて見物には一向に身が入らぬものさへあ

る。(虞美人草)

□船頭が客人に、あなたは船が好きですかと聞いた時、好きも嫌ひもお前の舵の取り様一つさと答へなければならぬ場合がある。責任のある船頭にこんな質問を掛けられる程腹の立つ事はない様に、自分の好悪を支配する人間から素知らぬ顔ですきかきらひかを尋ねられるのは恨めしい。(同)

□呼吸が合はねば不安である。相手を眼中に置くものは王侯と雖も常に此感を起す。(同)

□一刻の安を貪つた後は安き思ひを尙安くする爲に裏返して得心しなくなる。(同)

□かつて龜に聞いた事がある。首をだすと直ぐ打たれる。どうせ打

たれるとは思ひながら出来るならばと甲羅の中に立て籠る。打たれる運命を前に控へた間際でも一刻も首は一刻丈縮めて居たい。

——(同)

□人を屈腹させないと到底自分も屈腹させる事が出来ない。あやふやな柔術使は一度往來で人を抛げて見ない内はどうも柔術家たる所以を自分に證明する道がない。弱い議論と弱い柔術は似たものである。(同)

□尖る錐に自分の股を刺し通してそれ見ると人に示すものは我である。自己が最も價ありと思ふものを捨て、得意なものは我である。我を立てば虚榮の市にわが命さへ屠る。(同)

□はかない事を果敢ないと知りながら頼みにするときは只其頼み丈

を頭の中に描いて動かずに落ち付いて居る方が得策であるが、さてさうは行かぬもので、心の願と實際が合ふか合はぬか是非共試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてゐる事です。すら最後の失望を自ら事實の上に受取る迄は承知出来んものである。(吾輩は猫である)

□小人から罵詈されるとき罵詈それ自分は別に痛痒も感ぜぬが、其小人の面前に起臥しなければならぬとすれば誰しも不愉快だらう(草枕)

□熟睡のうちには何人も我を認め得ぬ。明覺の際には誰あつて外界を忘るゝものはなからう。(同)

□いくら自分がえらくても世の中は到底意の如くなるものではない

落日を回らす事も加茂川を逆まに流す事も出来ない。只出来るものは自分の心丈だ。(吾輩は猫である)

□世の中には悪い事をして居りながら自分はどこ迄も善人だと考へて居るものがある。是は自分が罪がないと自信して居るのだから無邪氣で結構ではあるが、人の困る事實は如何に無邪氣でも滅却する譯には行かぬ。(同)

□今に人間が進化すると神様の顔へ豚の翠丸をつけた様な奴ばかり出来てそれで落付きが取れるかも知れない。(虞美人草)

□世界は色の世界である。只此色を味へば世界を味はつたものである。世界の色は自己の成功につれて鮮やかに眼にうつる。鮮やかなる事錦を欺くに至つて生きて甲斐ある命は尊い。(同)

□世界は色の世界である。形は色の殘骸である。殘骸を淪つて中味の旨さを解せぬものは方圓の器に拘つて盛り上る酒の泡をどう片附けて然るべきかを知らぬ男である。いかに見極めても皿は食はれぬ。唇をつけぬ湯は氣が抜ける。形式の人は底のない道義の扨を抱いて路頭に踟躕してゐる。(同)

□世界は色の世界である。いたづらに空華と云ひ鏡花といふ。眞姫の實相とは世に入れられぬ畸形の徒が、寄せられぬ恨を黒甜郷裏に晴らす爲の妄想である。盲人は鼎を撫でる。色がみえねばこそ形が究めたくなる。手のない盲人は撫でる事すら敢へてせぬ。もの、本體を耳目の外に求めんとするは、手のない盲人の所作である。(同)

蘆花の人情觀——六十七章

- 成功はすべての物を金にす。(自然と人生)
- 位置は猫を虎にする。(黒潮)
- 敗者の下ぐる頭は蹂躪せられ、勝者の微かなる一黙頭も美德と稱せらる。(自然と人生)
- 地位が出来たら氣焰はなくなる。(黒潮)
- 成功は由來度量を與へ、自滿は奇體に思慮を與ふるを好むものである。(同)
- 完全は人を惡み、缺點弱點あるが爲めに他を恕すは已み難い人情

である。即ち弱點は處世の上から云つて人の安全瓣である。(同)

□何處の里でも成功に嫉妬は形の影で離れぬ。(思出の記)

□豕は極熊の白きを嘲り、信天翁は金鵝の日を睨んで昇るを笑ふ。
(巡禮紀行)

□輕薄の眼に熱誠は變物なり。凡庸の眼に非凡は狂なり。(同)

□世は道行に汲々として、道路に日を暮し、天才は即ち往々飛躍して目的に進む。(同)

□肉に生れて肉に擄へられたる我儕人の子は形によらざれば解する能はず。(同)

□世には他人の事とし云へば悪くばかり見える眼がある。またよくばかり見へる眼がある。(思出の記)

□執着は常に力であるが、執着は終に死である。(みずのたはこと)

□人の心の田地に落ちた種は、早かれ晚かれ決して生へずには居らぬ。(思出の記)

□負けるが恐さの中立は卑怯の骨頂だ。(同)

□不幸は伴侶を好む。(同)

□言ある悲しみは悲しからず。(自然と人生)

□泣く者は苦を減ず。哀き樂器は涙よりして人を慰む。(同)

□涙は湧くほど痛くなる。(寄生木)

□笑ふ者は、笑はれる者に笑はれる。(同)

□大なる困難は小なる辛苦を樂に思はせ、皆無は貧乏を富の如く思はしむ。(思出の記)

- 肉は壓かざる事稀なり。(自然と人生)
- 愁じいにやさしき心はありながら、其源を溯り得ず、支へ難き勢の流すまに、見すく波瀾洶湧の海に捲き込まれ行く人哀れむ可し。(巡禮紀行)
- 愁じ色々斟酌されるのは、無理非道を云はれるよりも餘程辛い。(自然と人生)
- 主義も同情も要するに自家發展の現象のみ。(黒潮)
- 保全の保護のと騒いでも、實は利益の問題に外ならず。まさかの時には甘い汁だけ吸つて骸は勝手に抛下さる。(同)
- 人を憐れむのは不愉快なものではない。憐まるゝ者は其様でないかも知れぬ。(同)

- 當局の苦心は當局でなければ知らぬ。局外に立つて何も知らず、無責任の罵詈攻撃は容易い事だ。(思出の記)
- 怒罵は忍ぶ可し。冷笑は忍ぶ可からず。(自然と人生)
- 腹立しきは或は人より、或は吾衷なる或ものより、吾非を示されて吾と吾が良心の前に悔悟の膝を折る時なり。(不如歸)
- 灸所を刺せば猛獸は叫ぶ、吾非を知れば人は怒る。(巡禮紀行)
- 孤立は固より不利なもの、淋しいもの。併しまた自由なもの、好かれて困れば嫌はれて結構な事もある。(思出の記)
- 人を悪むは吾心に毒を孕む様なものだが、人に悪まれるのは、(若し吾々清白の良心にあらば)たかゞ皮膚の痛みに過ぎない。(同)
- 人の鬱憤は何處にか漏れずには居らぬ。(同)

- 復讐、々々、世に心よきは悪しと思ふ人の血を啜つて、其頬の一瓣に舌鼓うつ時の感なるべし。(青山白雲)
- 好きなものを好くは本能である。嫌ひなものを好くに我儕の理想がある。(みずのたはこと)
- 本能から出發して、我等は個々理想に向はねばならぬ。(同)
- 本能は滅すべからず。不良青年は殺さずして導く可きであることを忘れてはならぬ。誰か其懷に多少の種を有つて居らぬ者があらう。(同)
- 腹壁截開よりも、脱疽截斷よりも、苦痛は「實際」の荒々しい手に理想の眼の膜を截らるゝ時である。(思出の記)
- 理想は映像の如く、走つても追つても後ざまに逃げる。追ひ疲れ

て、ばつたり砂場に倒れながら眼をあげて、猶前方にイひ笑貌の「理想」を眺むる時、湧き出づる涙こそ眞に人生に於て最苦最痛の涙であらう。(同)

□ 人間は宇宙の一分子。如何しても宇宙の大本原と一致しなければ満足は出来ない。(同)

□ 宗教の直覺が授くる眞理は、往々平凡に見え、學者の高談微妙の論も、往々人をして五里霧中に見すてる事がある。(巡禮紀行)

□ 悟りは一時に開けるもの、癖は中々手間取る。(自然と人生)

□ 必死の場合こそ一致もあれば合力もあるが、平生の場合に勢力の競、利益の争は免れ難い數である。(黒潮)

□ 力の歎美は何處も同じ事なり。(巡禮紀行)

□人に限らず、樹木でも大きいものは例へ寄つても誠に心地の快いものだ。(思出の記)

□名將陣に臨み、名優場に上ると何しか其處に魂が入つて場面が活潑と引立つて来る。何と云つても人物の魔力は争はれないものだ。

(同)

□人間は愚かなものだ。眞に基督を十字架につけて置いて、猶ほ基督々々と待つて居るは、昔のユダヤ人ばかりと思へば決して左様でなく、我儕は毎に同一劇を繰り返して居る。(同)

□古の大人豪傑と云へば宮に祠り畫にかき、記念碑を建て詩歌に詠じ、金泥をもて其傳記を書いても猶足らぬ癖に、鼻の先に佇ずむ大人をば氣もつかず、途に袖觸合ふとも知らず看過すはまだしも

少し異なる人間と見れば直ぐ化物視して迫害を加へる。而して猶偉人出でよ、天才生れよと云ふ。其偉人天才を幾何無慘々々苔で傷め、二葉で摘んで了つたか知れぬ。(同)

□世にも強きは自ら是なりと信ずる心なり。(不如歸)

□何も世間が悪い事をするから、自分も悪い事をして宜いと云ふ法はありませぬ。(同)

□戦闘は不識庵勝つて、終局の利は機山が收める。(思出の記)

□糞尿にも道あり、蛇も菩提に導く善知識であらねばならぬ。(みずのたはこと)

□道は近きにありて之を遠きに求む。泉は脚下にあり、掘らざるのみ。此眼開く時、宇宙吾にあり。此眼開かざれば悟空の雲に乗つて

無限を造るも終に何の獲る所ぞ。(巡禮紀行)

□幕合の長いのも亦一興だ。(不如歸)

□珍らしいから眼迷ふ。(黒い目と茶色の目)

□裸の快味は懺悔の快味だ。さらけだした體の土用干、靈魂の煤掃き。(みずのたはこと)

□花でも何でも、日本人はあまり散るのを賞翫するが、其も潔白で宜いが過ぎると宜くない。戦争でも早く討死する方が負だ。今少し剛情に、執拗に、氣長な方を奨勵したい。(不如歸)

□生命は共通である。潔癖は小さな自我である。吾儘者の鄙吝な高慢である。(みずのたはこと)

□潔癖は贅澤である。(同)

□直進は衝突を豫想す。(巡禮紀行)

□調和は單調の謂にあらず。調子は實を枉ぐるの謂にあらず。(自然と人生)

□彼を識るは彼を愛する所以なり。(同)

□幾歳になりても可愛がられて嬉しがらぬ子はなし。(不如歸)

□恐るべきは感情の齟齬から來る衝突である。(黒潮)

□感情は得て眼鏡を曇らすものだ。(同)

□手を把つて胸襟を開けば笑つても濟む事も、其間に種々の事情と云ふものが出來て毫厘の末が非常の悲しむ可き事に立到る。(同)

獨歩の人情觀——七十六章

- 人情と獸情とは、科學的に云へば世界に行はるゝ同等の現象に過ぎず。(欺かざるの記後篇)
- 直覺的感情の高潔幽玄神秘なる者必ずしも善行せず。實行せず。成功せず。(同)
- 直理は形容に非ず。(同)
- 眞理其者の力は、必ず爾のあらゆる口實に勝つ可し。(同)
- 口實は爾を支配す。(同)
- 眞理は最も深き最も廣きハーモニーのみ。(欺かざるの記前篇)

- 最も嚴肅なる事實は最も嚴肅なる心にのみ映じ來る。(後篇)
- 恐怖と無明は汝を小にす。(同)
- 高き眞の世界は恐怖の關門の奥にあり。(同)
- 小義、虛榮、恐怖、皆暗黒の子也。(同)
- 爾、眞に疑ふならば眠る能はざるべし。(同)
- 沈思冥想は靈の活動也。(同)
- 疑問の前には人眞面目となる。不思議の前に人自ら嚴かに立つ。(同)
- 理想は人なき時に催す主我的妄想也。人の面を見れば、世の中に出づれば直ちに吠ゆるもの也。(同)
- 社會事務を盡すに當りて、亂雜、不規則、怠惰、臆病なる可から

ず。若し然らば汝の理想も何の用あらんや。(前篇)

□「社會事務」は自信を以て爲さる可きものなり、勞作を以て爲さる可きもの也。(同)

□止め得るの考究は考究に非ず。(後篇)

□凡そ宇宙觀と人生觀とを有たぬ者程見識の卑しきは非ず。(同)

□靈の要求なかるべからず。靈は靈の自由、權利、義務を求めざる可からず。(同)

□パッションは酒の如し。一時人を激發せしむれども、其結果は醒也。(前篇)

□我等の智識は比較を好み、比較に依りて判斷の正確を保證す。(病床録)

□比較は最も能く吾人に人心の變化を教ゆ。(前篇)

□比較は實に人生の意味を研究し、人心の變化を見るに最も便利なる法なり。(同)

□自然と人事とに對して、人は各之を見る眼を有す。其眼は天然の眼に非ざる也。其前に各色の眼鏡置かる。そは無意識に置かれたる也。(同)

□自然とわれと一致調和せず、人事とわれと一致調和せず。此時程苦しき時はあらじ。(同)

□人及び其交友に對して技巧を弄する人は自己に確固たる信念なきが故なり。自信ある人は決して己の感情を偽らず、小細工を弄せずして人に交はる。(病床録)

- 自信なき人は己の感情を披瀝するの勇氣なし。(同)
- 大膽に行動する能はざるは感情の低ければ也。(同)
- 人に威張るは積極的主義也。人に頭を下ぐるは消極的主義也。(後篇)

□ 世には偏狹を矜りて自ら高しとする者あり。嗤ふ可し。眞に高き
の士は糞尿穢濁の間にありても容易に其圭角を顯すものに非ず。

(病床録)

- 人の慾望は將來の大なる慾望の爲めに制せらるゝもの也。(同)
- 超然自由の大氣を呼吸する人は自然圓滿の人なり、靈の人なり。
齷齪たる覇束に苦しむ人は肉と境遇と行掛りの人なり。(前篇)
- 得意の前には腐敗し、不如意の前には世を恨み人を怨らむ。(同)

□ 同情は虚偽なり。虚偽に非ざるまでも誇張せる感情也。(病床録)

□ 若し同情と以て量に測るを得るものとし、之を一匁とせんか、其
一匁を百萬倍にしたるものは實感也。百萬倍すと雖も同情の實感
に及ばざるや遠し。(同)

□ 人を束縛する者、何處にある。束縛は外物に存せず、感情にあり。

(前篇)

□ 夫れ誤解は誤解を生む。人は感情の動物なり。人の判定は半ば感
情に因る。則ち人事多くは感情に決す。然らば感情に由りて誤解
せられたる程恐る可きは非ざる可し。理論の容易に入り難きに至
らん。故に識者は感情を利導す。凡て事物の誤解多く感情の誤解
なり。故に此感情を導いて、誤解を教ふるは教師、哲人の任なり

とす。感情の支配者は力ある支配者也。感情の教師は深き教師なり。社會事物をして誤解に了らしむる勿れ。之れ教師、哲人の職務也。(同)

□誤解邪推は光明正大の敵なり。(後篇)

□曖昧は癡痺なり。靈の盲目なり。(同)

□美は信ずるに由りて美のみ。批評して何の意味あらむ。(同)

□人が此世界に求むべきものは愛と美となり。此二者はこれ真也。(同)

□嗚呼美妙、「吾」をして絶望より煩悶より救ふものは爾也。(同)

□美妙！決して解剖し得べきものに非ず。愛これ亦然り。(前篇)

□幸福、満足は美妙を以て最上となす。(同)

□外より云へば美妙、内より云へば情、これぞ人の命なる。これ又悠々たる天地の心なる。真理とはこれのみ。(後篇)

□美妙感は人をして小打算を忘れしむ。小打算は不自由の極なり。(同)

□人情の最も其本然に動くは美妙を感じたる時也。(同)

□最も高尚美妙の關係、而して又一轉して最も醜怪卑陋の關係たり。(同)

□吾はシエクスピリアに非ず。吾はゲーテに非ず。吾はユーゴーに非ず。吾はウォールズウォールズに非ず。孔子に非ず。佛に非ず。吾は吾也。吾を生む者は神、吾を育つる者は宇宙、吾を養ふ者は人情也。(前篇)

□情は美の極處に動く。されど時に自家の姿を顧みて自ら誇るの醜態を現はす。意志は然らず。深く達せず、されど強く行く。凡ての幻影を打ち破りて進む。情は蒸氣也。力也。意志は機關也。之を通じて始めて情に力あり。情の猛烈を憂へず。機關の薄弱を懼る。意志のみを力なりといふは誤謬也。(後篇)

□善も美も徳も眞も、情の泉に生れずして、人心に活く可くもあらず。(前篇)

□偉大の思想は情に由りて生命あり。(同)

□物質の生命は機關なる可し。但し靈の生命、精神界の生命は實に情也。智の前に情あり、情は水晶液なり。智は網膜也。人間情あり、始めて物を觀るを得。(同)

□シンセリテイは個人感に入る眞の入口なり。(同)

□シンセリテイを殺す者は社會感也。故に人間墮落の最要件は社會感也。宗教を殺す者悉く社會感なり。社會感とは人間が社會に生み落されし結果必然の感なり。社會感は小兒の時代よりして人間感情の周圍に煙の如く掩ひひそむ。生長するに従て亦拂ふ可からざるに至る者也。(同)

□萬人悉く個人感の頂上に達したる時に於て天國即ち地上に来る。(同)

□天才の目的は社會感を破るにあり。歴史は之を證據立つるに非ずや。(同)

□個人感は自然を生かし、社會感は自然を殺す。(同)

□自動的なると受動的なるとは、極めて微妙なる心理作用に由りて分かるゝと雖も、已に分かるゝ以上は其差は又非常なり。(同)

□自動的なる決して容易の事に非らず。意志、堅猛ならずんば心必ず受動的に働く。心一度び受動的に働く、則ち齷齪、促々、窃々、徒らに自ら苦しんで而も道に於て得る處なく、其事を爲すは砂上に家を建つるが如し。(同)

□自信ある者は決して受動的ならず、信仰ある者は決して受動的ならず、天職を知り天命を知る者は決して受動的ならず。自動的の人は餘裕あり、寛容あり、親しむ可く、敬す可く、信すべく、任ず可き男子なり。(同)

□自動的の人は積極的に事を務め、受動的の人は消極的に事に當る。

(同)

□徳を建て、事をなす者、必ず自動的なり。(同)

□自動的の人は天に對し責任を信ず。其信するや必ず強く且つ堅し。自動的の人は其事業職分の前には水火を懼れざる也。白刃を蹈むも忌避する所なし。斃れて後ちに止むは實に自動的の人にして始めて之を見る。一言以て之を盡せば、自動的の人は自ら務め自ら進んで天來のインスピレーションを感得するの人なり。一度感得して失はざるの人也。(同)

□煩悶は心靈の鼓動也。良心の刺戟也。人間秘密の音楽也。人若し之を御するに建猛なる意志の力を以てし、精勵苦闘せば精神一段の進歩を見ん。(同)

□人と生れて人の事を痛快に考へ、親切に感ずる能はざるは不幸なる哉。咀ひなる哉。我自ら人と生れ乍ら我を重んずる能はざる者は奴隸なる哉。自殺なる哉。(同)

□吾は自らの靈魂を貴重す。故に朋友の靈魂を貴重す。(同)

□自由にして獨立のソール、唯だ神の者也。(同)

□涙に健全の涙あり。人情の幽音悲調を聞いて注ぐ涙は、心靈を洗ふ神泉也。彼の薄者と空想とに報いられたる涙は至情氷心を殺す者也。(同)

□人間には智、情、意の三つあり。此變化和合消長の如何に由りて或は墮落し或は憤興す。智と意が勝つ時は情も亦高く清し。智と意を強く堅くせんと思はゞ又情の高く清きを要す。時間の經過は

則ち此三者が行動の道筋なり。(同)

□わが見る美は形なり。わが感ずる善はバツションなり、共に信仰に非ざる也。(同)

□人自ら老ゆ。されど人情の至妙は老いざる也。美は亡びざる也。人の永久の生命は老ゆる事なし。(同)

□自然と人心は無邊なり。其中に自ら一致あり。一致の中に無限の變化あり。——シンバシーある者に非ずんば、此者の大一致と大變化のヒユマニテイの永久無窮の音を聞くを得ず。——シンバシ

ーは神の心なり。自由は茲にあり。(同)

□己れ为天職をばコンモンセンス的ノオレッヂにて量るは斷じて避く可し。されど人知らずく此弊に陥る。自ら理想の人と稱する

者亦た然り。(同)

□人間の生命——人生は哲學者、詩人の問題也。——宇宙は哲學者詩人の題目也。(同)

□哲人の跡を慕ふは時にまた一種のバニテイ也。(後篇)

蘆花の家庭觀——三十六章

□人は妻によりて立身出世する事もあり、又妻によりて人格を下げる事もある。(寄生木)

□猿猴のよく水に下るは、つなげる手あるが爲め、人の立身するはよき縁あるが爲め。(不如歸)

□身も立ち名も揚つてからの結婚は望しいが、土臺から夫婦で築き起した家はまた格別の煩惱がつく。(思出の記)

□好い嬬持ちは金持ちである。(同)

□陰陽配合は自然の理である。(寄生木)

□好家妻と云ふものは、稀には良人にすゝめて他處のお酒を飲ます
ものです。(黒潮)

□情にあらざる結婚は得て不幸に終る。(青蘆集)

□義理ある結婚に碌な例はない。(寄生木)

□「小糠三合」の諺は經驗の生む所だ。(同)

□末代までも婿よと云はるゝは男兒の恥だ。所詮男は裸百貫、腕一
本で出世するのだ。(同)

□一夫一婦は支那の聖賢も命じなかつた。日本の英雄も行つた例が
なす。(黒潮)

□獨身の女は如何しても不具です。(黒い目と茶色の目)

□大きな事業は獨身と定つたやうなものだが、其様な人は萬人の中

一人あれば大したものです。(同)

□如何しても大國民の建物は好家庭の煉瓦を積まなければならぬ。

(同)

□良禽は木を擇んで棲み、淑女はよき紳士を擇んで嫁す。(思出の記)

□家を粗略にするのは女の恥辱です。(黒い目と茶色の目)

□夫婦の仲のよいのは、樂器の調子がうまく合つて行くのを聞く様
に、餘所目餘所耳にもわるくない。(同)

□夫の亂行は夫人の不幸と並び長ず。(自然と人生)

□外でやさしい人に限つて、内の亂暴がひどいのはさまつた相場で
す。(黒潮)

□喧嘩は兩成敗つて云ひますが、男と女となると體は小さし、力は

弱し、如何しても男の無理が通り易い。(同)

□姑御には馴々しく、成丈け近くして、婿殿は姑の前で毒にならん程の小悪口もつく位でなければならぬ。(不如歸)

□姑媳の喧嘩は、大抵若夫婦の仲が好過ぎて、姑に孤立の感を起さすから起るのが多い。(同)

□呼吸さへ飲込むと、鬼の嫁でも蛇の女房にでもなれる。(同)

□何でも彼でも負けるのだ。叱られても負ける、無理を云はれても負ける、斯方が是ければ猶負ける。さうすると先方で折れて来る。(同)

□耗つても錆びても心棒は心棒だ。心棒が廻らぬと家が廻らぬ。(みみずのはこと)

□子供が親を鹿馬にするのは無論間違ひは云ふまでもないが、親も子供に馬鹿にされぬ要心が肝要だ。(黒潮)

□子を知る者、親に若かず。然れども子を知らざることも亦た親に若かず。(自然と人生)

□女の子は男親になづき、女親は男の子を可愛がる。(黒潮)

□母なる者は決して絶対的權力を其子に有するものに非ず。(不如歸)

□何を云ふても親のない者ほど哀れなものはない、お金くくと近頃は金ばかり持囃す世の中になりましたが、億萬圓でも買はれないのは親の愛でせう。なんぼお金があるたつて、牛乳羊乳は買つて飲みませう。乳母も雇ひませうが母親の乳房は買はれますまい。(自然と人生)

- 兄弟牀を對するも夢は東西に飛ぶ。(黒潮)
- 骨肉は情なり。傾向は天なり。(同)
- 一人で吾帶をしむる年頃になると、一つ翼の下に育つた血筋の兄弟より、他人の妻が可愛くなる。(寄生木)
- 長男は戸主だ。二男三男は男根一本だ。(同)
- わが生んだ子であれば五人あれば五體の指、三人あれば鼎の金、どれが悪い、どれが可愛いと云ふことはないなれども、世に次男三男ほど憫なものはない。(同)
- 喧嘩をしても、打つても打たれても、罵つても罵られても、絶交しても骨肉は骨肉だ。まさかの時は飛んで来て力になつて呉れる。(同)

漱石の家庭観——十五章

- 子を知るは親に若かずといふ。それは違つてゐる。お互に喰ひ違つて居らぬ世界の事は、親と雖も唐天竺である。(虞美人草)
- 世の中では否應なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがつて居る人もあるが、それは餘つ程世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事だ。(同)
- あらゆる意味の結婚が都會人士には不幸をもち來たす。その原因を云へば都會は人間の展覽會に過ぎないからである。(それから)
- 蘭は幽谷に生じ劔は烈士に歸す。美しくしき娘は名ある聲を取らぬ

ばならぬ。(虞美人草)

□既婚の一対は雙方ともに、流俗に所謂不義の念に冒されて、過去から生じた不幸を始終嘗めなければならぬ。(同)

□妾を置く餘裕のないものに限つて蓄妾の攻撃をする。(それから)

□つらく目下文明の傾向を達観して遠き將來の趨勢を卜すると、結婚が不可能の事になる。驚く勿れ結婚の不可能。譯はかうさ。今の世の中は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一國を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格が凡でなかつた。あつても認められなかつた。それががらりと變るとあらゆる生存者が悉く個性を主張し出して、誰をみても君は君、僕は僕だよと云はぬ許りの風をする。ふたりの人が

途中で逢へば、うぬが人間ならおれも人間だぞと心の中で喧嘩を買ひながら行き違ふ、これ丈個人が強くなつた。個人が平等に強くなつたから個人が平等に弱くなつた譯になる。人がおのれを害する事が出来にくくなつた點に於て、慥かに自分は強くなつたのだが滅多に人の身の上に手出しがならない點に於て、明らかに弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが弱くなるのは誰も難有くないから、人から一毫も犯されまいと強點をあく迄固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやらうと弱い處は無理にも擴げたくなる。かうなると人と人の間に空間がなくなつて生きるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張りつめてはち切れる許りにふくれ返つて苦しがつて生存して居る。苦しいから色々の方法で個人

と個人との間に餘裕を求め。かくの如く人間が自業自得で苦しんで、其苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制だ。日本でも山の中へ這入つて見給へ、一家一門悉く一軒のうちにこゝろをこゝして居る。主張すべき個性もなく、おつても主張しない。あれで済むのだが文明の民はたとひ親子の間でもお互ひに我儘を張れる丈張らなければ損になるから勢ひ兩者の安全が保持する爲には別居しなければならぬ、歐洲は文明が進んでゐるから日本より早く此制度が行はれて居る。たま／＼親子同居なるものがあつても息子がおやぢから利息のつく金を借りたり、他人の様に下宿料を拂つたりする。親が息子の個性を認めて之に尊敬を拂へばこそこんな美風が成立するのだ。此風は早晚日本へも是非輸入しな

ければならぬ。親類はとくに離れ、親子は今日に離れてやつと我慢してゐる様なもの、個性の發展と發展につき、此に對する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては樂が出来ない。然し親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない譯だから最後の方案として夫婦が分れる事にする。今の人の考へでは一所に居るから夫婦だと思つてゐる。夫が大きな了見違ひだ。一所に居る爲めには一所に居るに充分なる丈個性が合はなければならぬだらう。昔なら文句はない。異體同心とか云つて目には夫婦に見えるが、内實は一人前なんだから。夫だから偕老同穴とか號して死んでも一つ穴の狸に化ける。野蠻なものだ。今はさらは行かない。夫は飽迄も夫で、妻はどうしても妻だから、其妻が女學校で行燈

袴を穿いて牢乎たる個性を鍛へ上げて束髪姿で乗り込んで来るから、とても夫の思ふ通りになる譯がない。又夫の思ひ通りになる様な妻なら妻ぢやない、人形だ。賢夫人になればなる程個性は凄いい程發達する。發達すればする程合はなくなる。合はなければ自然の勢ひ夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩迄夫と衝突して居る。まことに結構な事だが賢妻を迎へれば迎へる程雙方共苦しみの程度が増してくる。水と油の様な夫婦の間には截然たるしきりがあつて、それも落ちついてしきりが水平線を保つて居ればまだしも、水と油が雙方から働きかけてるのだから家の中は地震の様にながつたり下つたりする。是に於て夫婦雜居はお互ひの損だと云ふ事に次第に人間に分つてくる。天下の夫婦は

みんな分れる。今迄は一所に居たのが夫婦であつたが、是からは同棲して居るものは夫婦の資格がないやうに世間から目されてくる。其時一人の哲學者が天降つて破天荒の眞理を唱道する。其説に曰く人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に陥る。苟も人間の意義を完からしめん爲めには如何なる價を拂ふとも構はないから個性を保持すると同時に發達せしめなければならん。かの陋習に縛せられていや／＼ながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蠻風であつて、個性の發達せざる蒙昧の時代はいざ知らず、文明の今日猶此弊竇に陥つて恬として顧みないのは甚しき謬見である。開化の高潮度に達せる今代に於て二個の個性が普通以上の親密の程度を以て連結され得べき理

由のあるべき筈がない。此都易き理由あるにも關らず無教育の青年男女が一時の劣情に驅られて漫りに合登の式を擧ぐるは悖徳没淪の甚しき所爲である。吾人は人道の爲め文明の爲め彼等青年男女の個性保護の爲め全力を擧げ此蠻風に抵抗せざる可からず。(吾輩は猫である)

□夫婦なんでものは闇の中で鉢合せをする様なものだ。要するに鉢合せをしないで済む處をわざ／＼鉢合せるんだから餘計な事だ。既に餘計な事なら誰と誰の鉢が合つたつて構ひつこない。(同)

□人間が絶對の域に入るには唯二つの道がある許りで、其二つの道とは藝術と戀だ。夫婦の愛は其一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして此幸福を完くしなければ天意に背く譯だ。(同)

□婚姻が不道徳になる時分には藝術も全く滅亡だ。(同)

□宇宙は謎である。謎を解くは人々の勝手である。勝手に解いて勝手に落ちつくものは幸福である。疑へば親さへ謎である。兄弟さへ謎である。妻も子も、かく観ずる自分さへも謎である。(虞美人草)

□此世に生れるのは解けぬ謎を押しつけられて白頭に儼個し、中夜に煩悶する爲に生れるのである。親の謎をとく爲には自分が親と同體にならねばならぬ。妻の謎をとく爲めには妻と同心にならねばならぬ。宇宙の謎をとく爲めには宇宙と同心同體にならねばならぬ。これが出来ねば親も妻も宇宙も疑である。解けぬ謎である。苦痛である。親兄弟といふとけぬ謎のある矢先へ妻といふ新しき謎を好んで貰ふのは自分の財産の處置に窮してゐる上に他人の金

錢を預ると一般である。妻といふ新しき謎を貰ふのみか、新しき謎に又新しき謎を生ませて苦しむのは預つた金銭に利子が積んで他人の所得を自ら持ち扱ふやうなものであらう。凡ての謎は身を捨て、始めて解決が出来る。唯何う身を捨てるか、問題である。(同)

□細君一人を知つて甘んずるのは、進んで自己の發達を不完全にする様なものである。(三四郎)

□昔の親は子に食はせて貰つたのに今の親は子に食はれる丈だ。(心)

□親から財産を譲られたものは何うしても固有の材幹が鈍る。つまり世の中と闘ふ必要がないから不可いのだ。(同)

獨歩の戀愛觀——五十九章

□戀は遊戲なり。遊戲中にも危険なる遊戲あり。小兒の火弄りの如し。戀は小兒の火弄り也。(病床録)

□火傷せる者は火を恐る。一度戀に敗れたる者は二度する勇氣なしと。大嘘なり。戀の經驗は繰返へすほど甘く且つ樂しかるべし。

(同)

□戀は竟に一種の遊戲たるに過ぎず。兩個の異性が互に相愛するに非ずして、相弄ばんとすれば也。(同)

□束縛は却つて戀愛の助手のみ。(欺かざるの記後篇)

□ 人生を飾ると云ふより、戀は人生を緩和し調節するなり。(病床録)

□ 戀は多く人生の苦痛を包むオペラなり。(同)

□ 戀は人間の思想を廓大せしむ。(同)

□ 土ある處必ず草あり。人の棲む處必ず戀あり。(同)

□ 戀の物語は當人に取りては最大の快樂なり、慰藉なり。例令その戀やぶるともその物語は怡し。得るも失ふも戀の涙は苦からず。

(同)

□ 人は自らを自然と同化同融せざれば已まざらんとす。場合により處により、人は何うしてもそこに戀なくして已み難き事あり。

(同)

□ 戀を闘なりと云ふ者あり。或は云ふを得べし。さる人にありては

自ら損失する事少くして、對者の弱點より多く攫まんとするに依る。さりながら、女は然う容易に自分の弱點を他に攫ませる動物に非ず。渠は額面以上の負擔なしには支拂をなさず。斯る場合の男は敗るゝ事必せり。(同)

□ 如何なる戀も、戀せる以上は必ず可能性あり。人は全然お話にもならぬ程の戀をする者にあらず。(同)

□ 吾れを偽り、吾れを誇大し、吾が人格を眞價以上に見せんとする之れ戀する者の眞の心なり。所詮戀は虚偽也。虚偽を知りながら尙其虚偽を誠と信じて相愛する、之れ戀の形なり。(同)

□ 戀は自家の理想を或る對照に投影し、吾れと吾が理想の幻影に欺かれて吾れを戀するなり。戀の醒めたる時、初めて其對照の眞値

を見得べし。(同)

□戀せざる男女は種痘せざる人の如し。何時如何なる處にてその病素に中らんも知れず、危し。されどその免疫期間は極めて短し。

或は全く無き人あり。(同)

□戀を戀する人にして初めて悲痛の戀をなすことを得。理想なき戀は遂に平凡なる戀なり。(同)

□戀は心の大なる革命なり。戀せざる以前の人生は緑なり。戀の色を以て紅とせば、戀せる後の人生は紫なり。(同)

□處女の戀は華やかにして夢の如く、其味淡し。色を以て之れを譬ふれば淡紅なり。年増の戀は濃厚にして執拗なり。色に譬ふれば深き青色なり。(同)

□如何なる男子も戀の前には跪ぶかざるべからず。泣かざる可からず。(同)

□戀は最も自然なる自然の姿を體現したるもの也。(同)

□戀は容貌の美醜に關せず。趣味の一致にあり。(同)

□戀愛に定義なし、唯式様あるのみ。(同)

□戀の議論は必ず決する時なし。何となれば渠等はその問題を決せんとするよりも、この式様を説かんとすれば也。(同)

□戀愛に時代ある筈なし。(同)

□死の前に戀なしと思ふは愚なり。今死する今にも、人は常に新しき戀をなすを得るもの也。(同)

□物語にならぬやうな戀はイヤ也。(同)

□戀愛、友愛、悉く主義の變形のみ。悉く肉の臭氣なり。土の上に生くるもの肉に非ずして何ぞ。(後篇)

□戀は飽くまで純潔なるべし、高尚なるべし、堅固なるべし、大膽なるべし。此四徳の一を缺くべからず、——純潔なる可きは男女兩性の徳のために、高尚なる可きは神に向ふ理想のために、堅固なる可きは互ひに相いだく心のために、大膽なる可きは世に對して恥づるなきために。(同)

□戀は美にして眞なり。されど女は醜にして偽に非るか。(同)

□戀人を愛す。されど女を憎む。(病床録)

□男女相愛して肉慾に至るは自然也。(同)

□若し夫れ肉の結果を恐れ、來る可き責任の煩を厭うて、それを抑壓

するが如きは現代的の戀に非ず。現代青年は戀の意義及び戀の終局を明らかに知る。(同)

□肉慾に至らざる戀の終局には男女は勝利を感じ然らざるものは其處に屈恥を感じず。(同)

□相愛して慾情起るも、慾情に伴ふて起る結果の煩累を厭ひ、責任に對して不安と恐怖とを念ひ其慾情を抑制するは不自然也。(同)

□肉交なき戀は事實に非ずして空想なり。醒めての後は夢の如し。(同)

□第三者の目より戀する男女を見れば、一の痴態に過ぎず。されど戀する男女にとりては、其痴態も眞劍なり。眞面目也。(同)

□失戀に苦しきはその自尊心の毀損なり。自尊心を傷けざる戀は天

下にその例を聞かず。(同)

□失戀は詩人の糧なり。然り尊き糧なり。(同)

□戀の歡樂は、甘き樂しみにあらずして、苦き哀愁にあり。(同)

□戀を失ひて初めて人間の胸底に潛める最も強く、最も鋭く、又最も猛烈にして凄まじき戀の眞の力に觸るゝことを得。得られたる戀の満足は遂に平凡なる満足にして、詩とならず歌とならず。古來失戀の苦痛に泣かざる藝術家は殆ど罕なり。(同)

□詩歌に謳れたる戀は、此強烈なる力を以て胸に迫り來る失戀の苦痛に泣く人々の悲しき叫び也。一種の兒戲に過ぎざる戀も一たび失はれて初めて無限の光輝を發す。(同)

□戀は追憶して樂し、翹望して樂し。されど事實は苦し、悲し。(同)

□若き戀する人に告ぐ。戀の苦痛は多くその不安動搖より來る。其苦痛より脱せんとせば先づその不安動搖を避くる手段を講ぜよ。容易に避け得らるゝ道なり。(同)

□神の永遠の生命を信ずる能はずんば戀愛程墓なきものはなし。

(後篇)

□戀愛に永生の確信伴はずんばこれ靈魂の地獄也。(同)

□何者を愛するにも愛は多少の忍耐を要す。愛とは吾が靈の働きたり。然るに人は肉的感情に支配せられ易し。故に眞に愛せんと思はゞ此肉的感情に克たざる可からず。これ愛に多少の忍耐を要すと云ふ所以也。(同)

□愛情は世に勝つ。(同)

- 愛とは交換的ならず。愛は犠牲也。(同)
- 戀愛とても交換的なる以上は品高からず、誠深からず、涙薄く血濁れり。(同)
- 愛情と同情とを求むる勿れ。愛情と同情とを與へよ。愛し且つ敬せよ。愛せられ且つ崇まれん事を求むる勿れ。(同)
- 愛の消息は音樂の消息よりも強し。悲壯也。(同)
- 愛なる言葉は虚偽也。人は悉く主義の肉塊に過ぎず。世界は魔殿のみ。死は消滅也。(同)
- 嫉妬は愛をして濁水たらしむるもの也。火宅たらしむる者なり。(同)
- 愛は過去なり、現在なり、未來なり。(欺がざるの記前篇)

- 蜉蝣の如く生きて蜉蝣の如く消え逝く人間の存在！此存在を値ひする者實に唯だ〜愛のみ。(同)
- 此世は愛なり、愛は温なり。エゴイズムは猜疑なり。煩悶なり。寂寞なり。(同)
- 愛なる哉、愛なる哉、一語の加ふべきなし。(同)
- 愛は不死を教ゆ。(後篇)
- 愛史は常に秘史なり。故に常に哀史となる。(同)

蘆花の戀愛觀——二十二章

- 「戀は癖者」は踏みにぢつても容易に死なぬ。(黒い目と茶色の目)
- 戀は執念深くして、凡夫は淺猿しきかな。(寄生木)
- 多くの初戀は泡の如く消えざるは希也。(青蘆集)
- 片思ひでも思ひ切るは痛い。(黒い目と茶色の目)
- 戀は實に「腹のふくる」ものである。(思出の記)
- 多くの戀は盲目なり。何人も戀人の面目を鮮やかに見得る者は稀なり。(青蘆集)
- 迷い易いは若い女を見る若い男の眼。(黒い目と茶色の目)

□若い者に夫婦の撰擇をさすのは、色盲に幽禪の買物を頼むより猶ひどい。(同)

□娘の時代は、青年には皆好く見えるものだ。(同)

□青年の眼には渾ての少女は皆美人で、美人は盡く賢婦人に見える時代がある。(思出の記)

□頃日の若者は女に惚れられ様も知らぬ。(黒潮)

□青年の戀は、苔の虫よりも大敵、恐るべきものである。(思出の記)

□學を志ざば是非共名の稱さるゝまで、人を戀ふなら是非共吾家の妻に娶るまで行かなくてはならぬ。(黒い目と茶色の目)

□愛されぬは不幸なり。愛することの出來ぬは猶ほ更不幸なり。(不如歸)

□人は愛せずして生き能はず、寧ろ愛されずして活き能はず。

(青蘆集)

□若し信仰は智識の及ばぬ世界を見る千里鏡であるならば、愛は意志の到り得ぬ心靈に達する天浮橋であらう。(同)

□愛は水の如し。如何なる巖山も終に穿つ、萬里を隔て、年を隔て、も、生きて磁氣電氣の如く感ずるのは愛ではないか。(同)

□日光を吸はぬ草木が、よく育つがないならば、人の靈の發育に愛の必要は云ふまでもあるまい。(同)

□愛の力は常陸にも梅にも優るとも、讓ることなし。(寄生木)

□朝日の光が先づ接吻するは高山の頂、人の心の何事にも先づ向ふは愛する人の上。(思出の記)

□美しいものは可愛く、可愛いものは見たく、要するに百卷の美論も一個の美そのものに及ばない。(黒い目と茶色の目)

□信ずる者に愛する者を譽められるのは、朝日に玉を翳して見る様なもの、光は倍するのである。(思出の記)

樗牛の戀愛觀——十二章

- 戀は尙電火の如き也。吾等は其の由て來る所以を知らず、只其の現に然る所を認め得べきのみ。(樗牛全集二卷)
- 愛や、迷と見れば悟にて、悟と見れば迷なり。(同)
- 樂と見れば苦、苦と見れば樂、愛は畢竟苦しきが爲めに樂しき也、樂しきが爲めに苦しき也。(同)
- 愛に泣く人は喜び笑ふなきを悲めども、喜ぶべきものを捨て、笑ふべきものを去りて故らに悲み嘆く也、而かも彼は此悲哀をば如何なる幸福にも代ふべしとは思はざる也。(同)

- 吾人は生れて幸福ならざるべからず、而して遂に戀せざるを得ず。(同)
- 愛は既に吾人と共に生る。(同)
- 自我に對しては三世離るべからざるの友、人生に對して幸福の最大なる源、吾人の宿命は天に在らず、地に在らず、只此自己の胸奥に潜伏せる一點愛情の靈火に存す。故に吾人は界外に對して、此内面的必至の運命と現化^{アライズ}したるに非らざれば已まざる也。(同)
- 人の人らしきは其情にあり。(同)
- 天にありては星、地にありては花、人にありては愛、是れ世に美はしきもの、最ならずや。(同)
- 愛は吾れ人が生活の第一條件也。(同)

□吾人は戀愛を解せずして死する人の生命に、多くの價值あるを信ずる能はざる也。(四卷)

□愛は自己の外はあらゆる物を抽象す。其前には法律なく社會なく、己れ其唯一の智識、唯一の目的、又唯一の光明なり。世界は只此目的を助け、此光明に照らされたる限りに於て彼に對て其存在を有するのみ。一旦唯心の夢覺めて、社會と自我との衝突を感じたる曉にありては、吾れ社會を仆す能はざれば、只一死あるのみ、是を以つて百難潮の如く天を滔して掩ひ來るとも少しも驚かず。諷咏歎嗟從容として死に就く。(同)

漱石の戀愛觀——十八章

- 本當の愛は宗教心とさう違ふものではない。(心)
- 愛は信仰より成る。信仰は二つの神を念ずるを許さぬ。愛せらるべき資格に歸依の頭を下げながら、二心の背を輕薄の街に向けて何の社の鈴を鳴らす午頭馬骨、來るは人の勝手である。(虞美人草)
- 渝らざる愛を今の世に口にすることは偽善家の第一である。(同)
- 貧乏は戀を乾干にする。富貴は戀を贅澤にする。巧名は戀を犠牲にする。我は未練な戀を踏みつける。(同)
- 兄弟の間に戀の成立した例はない。(心)

□始終接觸して親くなり過ぎた男女の間には、戀に必要な刺戟の起る清新な感じが失はれて了ふ。(同)

□香をかき得るのは香を焚き出した瞬間に限る如く、酒を味うのは酒を飲み始めた刹那にある如く、戀の衝動にも際どい一點が時間の上に存在してゐる。(同)

□石佛に愛なし。色は出来ぬものと始めから覺悟を極めて居るからである。愛は愛せらるゝ資格ありとの自信に基いて起る。たゞ愛せらるゝ資格ありと自信して愛するの資格なきに氣の付かぬものがある。此兩資格は多くの場合に於て比例する。愛せらるゝ資格を標榜して憚らぬものは、如何なる犠牲をも相手に迫る。相手を愛する資格を具へざる爲めである。(虞美人草)

□愛の對象は玩具である。神聖なる玩具である。普通の玩具は弄ばるゝ丈が能である。愛の玩具は互に弄ぶを以つて原則とする。

(同)

□愛せらるゝ事を専門にするものと、愛する事をのみ念頭に置くものが、春風の吹き廻しで旨い潮の満干でばかりと天地の前に行き逢つた時、此變則の愛は成就する。(同)

□我を立てゝ戀をするのは、火事頭巾を被つて甘酒を飲むやうなものである。調子がわるい。戀は凡てを溶かす。角張つた繪紙鳶も船細工であるからは必ず流れ出す。我は愛の水に浸して三日三晩の長きに涉つてもふやける氣色を見せぬ。どこ迄も堅く控へてゐる。我を立てゝ戀するものは氷砂糖である。(同)

□沙翁は女を評して脆きは汝が名なりと云つた。脆き中に我を通す昂れる戀は炊きたる飯の柔かきに御影の砂を振り敷いて心を許す奥歯をガリ／＼寒からしむ。噛み締むるものに護謨の弾力がなくては無事には行かぬ。(同)

□戀が怒ると九寸五分が紫色に閃る。(同)

□嫉妬は愛の半面である。(心)

□天意には叶ふが、人の掟には背く戀は、其主の死によつて始めて社會から認められるのが常である。(それから)

□戀の満足を味つた人は暖い聲を出だす。(心)

□戀は罪惡である。さうして神聖なものである。(同)

□所謂靈の交換は相思の情の切ない時にはよくさう云ふ現象が起る

ものだ。一寸聞くと夢の様だが、夢にして現實より慥かな夢だ。
(吾輩は猫である)

漱石の女性観——二十四章

□驚くうちは樂がある。女は樂みが多くて仕合せだ。(虞美人草)

□女王の逆鱗は鍋、釜、味噌漉の御供物では直せない。(同)

□文明の淑女は人を馬鹿にするを第一義とする。人に馬鹿にされるのを死に優る不面目と思ふ。(同)

□諸君女に向つて聞いて御覽、「あなたは人が困るのを面白がつて笑ひますか」と。聞かれた人は此問を呈出した者を馬鹿と云ふだらう、馬鹿と云はなければわざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云ふだらう。侮辱したと思ふのは事實かも知れないが人

の困るのを笑ふのも事實である。であるとすれば是から私の品性を侮辱する様な事を自分でしてお目にかけますから何とか云つちやいやよと斷るのと一般である。僕は泥棒をする、然し決して不道德と云つてはならん。若し不道德などと云へば僕の顔へ泥を塗つたものである。僕を侮辱したものであると主張する様なものだ。女は中々利口だ。考へに筋道が立つて居る。苟も人間に生れた以上は踏んだり蹴つたりどやされたりして、而も人が振りひきもせぬ時平氣で居る覺悟が必要であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな聲で笑はれるのを快く思はなくしてはならない。それではなくては斯様に利口な女と名のつくものと交際は出来ない。(吾輩は猫である)

□女が偉くなると獨身ものが澤山出来て来る。だから社會の原則は獨身ものが出来得ない程度内に於て、女が偉くなくならちや駄目だ。(三四郎)

□同年位の男に惚れるのは昔の事だ。八百屋お七時代の戀だ。何故と云ふに二十前後の同じ年の男女を二人並べて見ろ、女の方が萬事上手だ。男は馬鹿にされる許りだ、女だつて自分の輕蔑する男の所へ嫁に行く氣は出来ない。尤も自分が世界で一番偉いと思つてゐる女は例外だ。輕蔑する所へ行かなければ、獨身で暮すより外に方法はないんだから、よく金持の娘や何かにそんなのがあつちやないか、望んで嫁に来て置きながら亭主を輕蔑してゐるのが。(同)

□迷はぬ者は凡て女の敵である。迷ふて苦んで狂ふて躍る時、始めて女の御意は目出度い。欄干に織い手を出してわんと云へと云ふ。わんと云へば又わんと云へと云ふ。犬は續け様にわんと云ふ。女は片頬に笑を含む。犬はわんと云ひながら右へ左へ走る。女は黙つて居る。犬は尾を逆にして狂ふ。女は益々得意である。(虞美人草)

□我の女は顯で相圖をすればすぐ来るものを喜ぶ。(同)

□我の女はいざと云ふ間際迄で細心の顔をせぬ。恨むと云ふは頼る人に見替られた時に云ふ。悔りに對する適當な言葉は怒である。無念に嫉妬を交ぜ合せた怒である。(同)

□女は只一人を相手にする藝當を心得てゐる。一人と一人と戦ふ時勝つものは必ず女である。男は必ず負ける。(同)

□具象の籠の中に飼はれて個體の粟を啄んでは嬉しげに羽搏きするものは女である。籠の中の小天地で女と鳴く音を競ふものは必ず斃れる。(同)

□女は肯定の辭に否定の調子を寓する靈腕を有してゐる。(同)

□男の用を足す爲めに生れたと覺悟してゐる女程憐れなものはなし。(同)

□實用の二字を冠せられた時、女は——美しい女は——本來の面目を失つて無上の侮辱を受ける。(同)

□家庭的の女は美しい世を打ち壊しに生れてきたも同様である。(同)

□渾名のついでる女にや昔から碌なものは居ない。(坊っちゃん)

□女は東西兩國を通じて一種の裝飾品である。米春にもなれん。志

願兵にもなれないが缺くべからざる化粧道具である。(吾輩は猫である)

□婦人といふものは兎角物をするのに正面から近道を通つて行かないで、却つて遠方から廻りくどい手段をとる弊がある。尤も是は御婦人に限つた事でない。男子と雖も文明の弊を受けて多少女性的になつて居るから、よく入らざる勞力を費して是が本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解して居るものが多い様だが、是等は開化の業に束縛された畸形兒である。(同)

□人間は魂膽があればある程、其魂膽が祟つて不幸の源をなすので多くの婦人が平均男子より不幸なのは全く此魂膽が有り過ぎるからである。(同)

- 女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはづれ
ても自分丈に集注される親切を嬉しがる性質が男よりも強い。(心)
- 『女には詩人が多いですね』『男子の弊は却つて純粹の詩人になり
切れない所にあるだらう』(三四郎)
- ラップをした事のないものに女は分らない。(同)
- 女を見るのは矢張り女の方が上手だ。(虞美人草)
- ある人が云ふ。あまりしとやかに禮をする女は氣味が悪い。又あ
る人が云ふ。あまり鄭寧にお辭儀をする女は迷惑だ。第三の人が
云ふ。人間の誠は下げる頭の時間と正比例するものだ。(同)

蘆花の女性觀——十八章

- 婦人對にしては言はざるをよしとす。已むを得ず言ふ時はなるべく
簡勁に言ふべし。肩を怒らし肱を張るべし。輕蔑の意を明白に
發表すべし。(思出の記)
- 婦人は自然に物質的になるべき約束の下にある。(みずのはこと)
- 女は冷かである。戀しても計算は中々忘れぬ。(黒潮)
- 女子は駄目だ。口でこそ心でこそ泣いて呉れる、嘆いて呉れる、
同情を表して呉れる。然し小田の蛙だ。(寄生木)
- 華族で金があれば馬鹿でも嫁に行く。金がなければ如何に慕つて

も唾もひつかけん。此が當今の姫御前です。(不如歸)

□戀の義貞、平相國、幽王の褒似、腑甲斐ない歴史は絶えない。女
色程馬鹿なものはない。(寄生木)

□坊主の家と女子の家は百歳になつてもないものだ。(同)

□女は百年の計、一に男による。(同)

□偉い人の妻に評判の好いのは滅多にない。(黒い目と茶色の目)

□牝鶏の晨するばかり齒痒いものはない。(寄生木)

□失へる玉は大にして去れる婦は賢なり。(不如歸)

□女に廢物はない。(みずのたはこと)

□婦人と云ふものは可愛ゆく馬鹿で、男子の鬱散の爲めに生れて居
る玩弄動物である。(黒潮)

□若い女、しかも嫁入際の若い女の器量を落して仕舞ふのは、中々

天下取りのナポレオンが島流しにされたよりも辛い。(自然と人生)

□女は容貌より教育が必要だ。(寄生木)

□醫師にして婦人の驕心を得るの術あらば、成功の四分三は已に約
束済である。(黒潮)

□嫉妬は女の身を亡ぼす毒蛇也。(黒潮)

□女でも思ひ込んだら男に負けはしない。男より餘程執拗で幽霊で
も女の方が餘計出る。(黒い目と茶色の目)

獨歩の女性觀——十七章

- 墓碑銘を信ずる方、女子を信ずるより確實也。(欺かざるの記後篇)
- 總ゆる女はその汚き夢を覆はんが爲めに美しき戀物語を喜ぶ。渠は自らの汚穢に堪へざるなり。(病床録)
- 一度背きたる女を追ふ事なかれ。(同)
- 女と争ふ場合來らば、寧ろ潔くわやまれ。(同)
- 戀する時手綱は短きに限る。(同)
- 女の前に泣く勿れ、常に笑ふべし。(同)
- 女は往々にして泣く眞似をなす事あり。一度も笑ふ眞似はなさ

ず。(同)

- 女はより多く撫でられんより、寧ろより多く打たれん事を望む場合多し。(同)

□執拗を以て女を責むる事なかれ。今の女は從順過ぐるに苦しむ。

(同)

□女は禽獸なり。人間の眞似をして活く。女を人類に分類せるは舊き動物學者の謬見なり。(同)

□女性の品性に誠實を缺くは薄弱なるが故也。(後篇)

□男には思想上の貞操あれども感情上の貞操なし。女には感情上の貞操あれども思想上の貞操なし。(病床録)

□男性は總て理想的にして、女性は總べて實際的現實的なり。故に

男子は其戀の現實に満足する事能はず、進んで更に強き銳き力に觸れんとし、其結果を豫想して時に戀人の死を願ふ事あり。是れ理想せる戀に到達せんと欲する男子の努力なり。斯くの如き戀は女性の人格其物に向つて放射する戀に非ず。所詮は戀を戀する者なり。(同)

□女性は實際的、現實的なり。直ちに現實の戀其物に熱して、極度の心熱を注ぎ、永く現實に止まる事を欲して現實以上の戀に觸るる事を知らず。男子にありては實在の戀其物に對して一種の空零を感じ戀せる戀を實現せんと欲する情の一層切なるを覺ゆ。男子の戀は動的にして長く現状に止まる事能はず。現實以上何等か高き戀の或物を理想し憧憬して進まんと欲す。(同)

□女性の戀は靜的にして、唯現在の戀に満足し現在の戀に誠實なる心熱を濺いで長く現在の戀に止まらんと欲す。故に女性は現在の戀に向つて全力を傾倒するを得れども、男性は實在以上の戀をなす故に、實在の戀に向つて全力を注ぐを得ず。茲に於て男女の戀は其根本に於て相異なる。失戀せざれば眞の戀に觸るゝ能はずと云ふは茲の事也。若し戀の理想を有し戀を戀する女性ありとせば、其所に初めて熱烈火の如く、何物をも焼き盡す底の戀は成立する也。(同)

□或る意味に於て藝娼妓などの卑しき女性が却つて戀の理想を構成し戀を戀するもの也。藝娼妓は淨瑠璃に俗謠に幾多の典型を示されて、それに依つて彼等の頭には一種戀の理想が形成せられたる

也。故に彼等の戀たるや、處女の戀に比して遙かに熾烈に何物をも焼き盡くし、如何なる事情をも排して尙ほ戀に向つて進まんと努力す。眼中父母なく、習慣なく、社會なく、只戀あるのみ、是に至つて互に強烈なる戀の火に身心を焼くことを得。(同)

□情死は戀の極致にして、而も藝娼妓に情死多きは、彼等の頭に戀の理想が構成せられ戀を戀するの心あればなり。(同)

樗牛の自然觀——七章

□吾人に祈るべき神なくむば、願くは先づ是の自然の大なる資を讚美せむ。(樗牛全集四卷)

□大自然の眞理の如何に大いなるよ。憐れむべき人々の装ひ、飾り、欺き、偽りつゝある間に、一切を押し包める大自然の眞理は、其一分の歩趨を枉げざるなり。(二卷)

□悠久なる自然は、限りなき平和の中に、是の人生の憂悶をつゝみつゝ、日毎く改悔の聲を促せども、人は遂に聽くところ無し。
(文藝界)

□天然は人の母なり。田舎は人生の素地なり。人間至純の感情は都會に於て容易に見る可からず。(四卷)

□自然を忘るゝは即ち人間を忘るゝ也。(同)

□自然に親しきものにして初めて人生を會得するを得。(同)

□實在の人生は決して自然に離れ得べきにわらず。(二卷)

漱石の自然觀——十八章

□自然が結んだものはいくら能才でも天才でもどうする譯にも行かない。(虞美人草)

□自然を翻譯するとみんな人間に化けて仕舞ふから面白い。崇高だとか、偉大だとか、雄壯だとか、みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻譯する事の出来ない輩は自然が毫も人格上の感化を與へて居ない。(草枕)

□山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白い丈で別段の苦しみも起らぬ。起るとすれば足が草臥れ

て旨いものが食べられぬ位の事だらう。然し苦しみのないのは何故だらう、只此景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり、詩である以上は地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲けする了見も起らぬ。只此景色が―腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此景色が、景色としてのみ心を樂しませつゝ、あるから苦勞も心配も伴はぬのだらう。自然の力は是に於て尊い。(同)

□吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として酔たる詩境に入らしむるのは自然である。(同)

□自然の有難い處は人に因つて取扱ひをかへる様な輕薄な態度はすこしも見せない。岩崎や三井を眼中に置かぬものはいくらも居

る。冷然として古今帝王の權威を風馬牛し得るのは自然のみであらう。(同)

□自然の徳は高く塵界を超越して、絶對の平等觀を無際限に樹立して居る。天下の羣小を壓いて徒らにタイモンの憤りを招くよりは蘭を九腕に滋き、薰を百畦に植ゑて、獨り其裏に起臨する方が遙かに得策である。世は公平と云ひ無私と云ふ。左程大事なものならば、日に千人の小賊を戮して滿圃の草花を彼等の屍に培養ふがよからう。(同)

□自然は是一幅の大活畫也。(吾輩は猫である)

□自然は自然を用ひ盡さぬ。極まらんとする前に何事か起る。單調は自然の敵である。(虞美人草)

□自然は對照を好む。(同)

□色は刹那に移る。一たび機を失すれば同じ色は容易に眼には落ちぬ。(草枕)

□木瓜は面白い花である。枝は頑固であつて曲つたことがない。そんなら真直かと云ふと決して真直でもない。只真直な短かい枝に真直な短かい枝がある角度で衝突して斜に構へつゝ全體が出来上つてゐる。そこへ紅だか白だか要領を得ぬ花が安閑と咲く。柔かい葉さへちらちら着ける。評して見ると、木瓜は花のうちで愚かにして悟つたものであらう。世間に拙を守る人がある、此人が來世に生れ變ると屹度木瓜になる。(同)

、□桃は果物のうちで一番仙人めいてゐる。何だか馬鹿見た様な味が

ある。第一核子の恰好が無器用だ、且つ大變面白く出来上つて居る。(三四郎)

□日本の莖は眠つて居る感じがある。(草枕)

□椿ほど人を欺す花はない。深山椿を見る度にいつでも妖女の姿を連想する。黒い眼で人を釣り寄せてしらぬ間に、嫣然たる毒を血管に吹く、欺かれたと悟つた頃は既に遅い——あの色は只の赤ではない。屠られたる囚人の血が、自から人の眼を惹いて自から人の心を不快にする如く一種異様な赤である。(同)

、□春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。(同)

□自然は第一義で活動してゐる。(虞美人草)

□雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動の聲にあらはれたもの、うちであれ程元氣のあるものはあるまじ。 (草枕)

□いくら詩人が幸福でも、雲雀の様に思ひ切つて一心不亂に前後を忘却してわが喜びを歌ふ譯には行くまい。(同)

蘆花の自然觀——十九章

- 自然は如何なるものを用ゐても絶好の趣味を作る也。(自然と人生)
- 自然主義の天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。
(み、ずのたはこと)
- 人間は兎角不自然なもの、自然ほど自然なものはない。(思出の記)
- 人が平氣に踏みしだく道邊の無名草の、其小さき花にも自然の大活力は現はれる。(み、ずのたはこと)
- 一日く〜と眼には見えぬが、黙つて働く自然の力をしみく〜感謝せずには居られぬ。(同)

- 自然は生く。一秒時も同じからず。(自然と人生)
- 自然は日々新たなり。(同)
- 自然は休戦の息つく間も與へて呉れぬ。(みずのたはこと)
- 一秒時の油断なく進む自然物の成長は思ひの外に早い。(思出の記)
- 自然は春に於てまさしく慈母なり。人は自然と融け合ひ。自然の懷に抱かれて限りある人生を哀み、限りなき永遠を慕ふ。即ち慈母の懷に抱かれて、一種甘へるが如き悲哀を感ずる也。(自然と人生)
- 張りつめた氷の下に湖水の心は躍り、降り埋む雪の下に火山の情は燃る。(思出の記)
- 高山の麓の谷は深い。(みずのたはこと)
- 永遠の二字は海よりも寧ろ大河の濤にあつて思ふ。試みに或大海

- の濤に立つて、決々たる河水の音も立てず、静かに息まらずに流れ流れ、流れて限りなく流るゝを見給へ。『逝者如斯夫』實に億萬々年の昔より、億萬々年の後に至るまで、無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流れを想ふ。(自然と人生)
- 如何に獅子でも虎豹でも、鐵の檻に囚はれては牙をむかうが陰らうが詮方がない。(寄生木)
 - 吾、毛蟲たりし時醜かりき。吾、蝶となりて舞へば人美しと讚む。人の美しと云ふ吾は曩昔醜かりし毛蟲ぞや。(みずのたはこと)
 - 吾醜かりし時、人、吾を疎み、忌み、嫌ひて避け、見る毎に吾を殺さんとしぬ。吾美くしと云はるゝに到れば人、争ふて吾を招く。吾變るか、人の眼なきか。(同)

- 土鉢に植ゑても、高麗交跡の鉢に植ゑても花は花なり。何れか日の光を待たざる可き。(不如歸)
- 罌粟の様に美しいのは直ぐ散る。蘇や、ヤケ草は摘んで棄て、踏みつけても中々色があせない。(寄生木)
- 無愛嬌な蘇より、刺があつても薔薇の花がよい。(同)

獨歩の自然觀——十四章

- 詩神は自然の中に住む。(欺かざるの記前篇)
- 自然は之を弄する者に其靈光を示さず。(欺かざるの記後篇)
- 自然の美と雖も、怠慢者には其深光を示さざる也。(同)
- 人間の多くは天地を忘却す。己れ自ら神聖美麗高壯偉大なる者の中に愛せられ、教へられ、慰められて存在する者なることを忘却す。(前篇)
- 大なる自然は能く人間をして黯然として自身の空影を顧みて泣かしむ。されど人類的主觀は此苦しき涙より救ふ也。(同)

□自然の奥には秘密がある。人は今以てこれに突入する事が出来な
し。(病床録)

□凡ての人間を吐吞する自然、無限無窮の自然よ。吾爾のうち
に在り。生きて爾のうち
に在り。死して亦爾のうち
にあるべし。(後篇)

□只心を開きて自然の前に立て。人間と自然との関係を最も率直に
感得せよ。(同)

□自然の限りなき力、其あふるゝ美光、これに對する先づ嚴肅にし
て忍耐なるべし。(同)

□自然は到る處に充滿す。(前篇)

□神なき自然は空なり。人情なき自然觀は空なり。(同)

□自然は吾唯一の書也。(同)

□自然は老いざる也。(同)

□假に響なき世界ありとせよ。人は直ちに悶死すべし。(病床録)

蘆花の宗教観——二十六章

- 神は偏なく見玉ふ。靈と誠を以て拜する者、柔和なる者、愛する者、唯よく地を嗣ぐことを得む。(巡禮紀行)
- 人は階級を作るを好めど、神は偏なく愛し玉ふ。上帝の前には英雄も幼な子なり。白痴も神の子なり。(青蘆集)
- 人は棄つるも神は汝を棄てず。(同)
- 造物主の判廷に情狀酌量はない。(思出の記)
- 父なる神よ、爾如何なれば斯くは我儕人の子を愛し玉ふや。我儕斯く愛せらるゝによりて我儕は眞に爾の子なるを知る。(巡禮紀行)

- 神は大風の中に在さず。芥子の種は廣き面積の土を要せず。(同)
- 肉に於ける基督の形見は天空と山野のみ。優去つて舞臺在り、肉消えて靈残る。(同)

□エルサレムの埋れたるは、猶基督の眞面目の埋れたるが如けん。(同)

- 信仰は決して愚夫愚婦の事ではない。士君子の本分です。(思出の記)
- 神を信ずるとは神の聖旨を純粹に行ふ事也。(巡禮紀行)
- 上帝を追ひ求むるは人心の本能です。(同)
- 心の懊惱は即ち靈の親を慕ふ煩悶です。(同)
- 心靈の活動は決して冷やかな常識の繩墨を以て律すべきもので無し。(思出の記)

□宇宙の事は智識の到り得ぬ境がある。信仰の眼でなければ上帝の面は仰がれぬ。(同)

□一日も怠るべからざるものは神の教へと人の踏むべき道である。
(寄生木)

□大局の上より打算すれば、人として神の子にあらざるなく、事として攝理の一部にあらざるなし。(巡禮紀行)

□敵も味方も等しく天の御子である。(寄生木)

□人は縁なり、世は命なり。神唯之を司る。(同)

□人は二人の主に事ふる能はず。世を愛する者は神を愛す。(巡禮紀行)

□假令其信仰の爲めに財産をなくして、人の物笑ひとなり、政府の心配となるとも、信ずる者は幸福である。(みいずのたはこと)

□信仰を説く者必ずしも信仰を有つ者でない。(同)

□信仰と生活の一致は容易で無い。(同)

□何れの信仰でも雑多な信者はある。(同)

□世界の信者が其信仰を遺憾なく實現したら、世界は夙に無事に苦しむで居たであらう。(同)

□我等は信が無い爲めに、統一が出来きない爲めに、おのづから明瞭なものも見えて聞えずして了ふのである。信ずる者には奇蹟は別に不思議でもない。(同)

□天の調合は往々にして小説家の配劑よりも詭へた様に行くものだ。(思出の記)

樗牛の宗教観——八章

- 神は不信の胸に宿らず。(樗牛全集四卷)
- 今や信仰は外にわらずして内にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否らざれば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。(二卷)
- 學說により信仰を求む。野に行つて魚を探るが如けむのみ。(四卷)
- 今の宗教に要するものは、知解以上の人物也。(同)
- 憂ふるものは喜を得、悲める者は望を得、あらゆる地上の不満足は、天上無限の光榮によりて解散せらる。(同)

- 靈なるもの能く靈を知る。(二卷)
- 迷信は世人が騒ぐほど左程怖るべきものではない。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道徳説である。(四卷)
- 迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりどちらでも好いのである。唯必要なるは精神である。赤誠である。不惜身命の大勇猛心である。(同)

獨歩の宗教觀——四十六章

- 上帝頭上に在します、光と榮と愛は彼に在り。(欺かざるの記後篇)
- 宇宙は全體也。神は全體の主人也。(同)
- 神をおとるゝは智慧のはじめ也。(同)
- 神は自から解く者の爲めに解き、自から助くる者の爲めに助く。(欺かざるの記前篇)
- 神よ。爾は聖なる希望を愛するものゝ心に充たしめ給ふ。(同)
- 神は觀る者を教へ給ふ也。爾の周圍を見よ。(前篇)
- 世界に立ちて死に勝ちチャンスに勝たば上帝慰安を給ふ。一生の

運命上帝に歸す。吾は一意專念、爲さざる可からざる事を爲す可きのみ。(同)

- 神の法律ほど確かなるは非ず。偏狭の心、頑固の心、卑劣の心に教ゆるには必ず地獄的苦悶を以てし給ふ。(後篇)
- 神は懷疑の報酬に煩悶と不自由を與へ給ふ。悪人は惡を作す。之れ罰なり。善人は善を爲す。之れ賞也。(前篇)
- 神の罰は自由を取り上げ給ふ也。神は其罪人を變轉不思議なる牢獄に投じ給ふ。(同)
- 神の愛を親しく感じ、生存中の義務を強く感ずる者は幸なる哉。(同)
- 爾宇宙の兒なる以上は、爾自ら天父を忘るゝ時だにも、天父は分

秒爾を忘れ給はざる也。(同)

□小我に苦しむ勿れ、博愛の自由に入れ。上帝の愛を思へ。たゞ上帝に依頼せよ。(後篇)

□神の賜を享けざる者は忘恩者ならん。不幸者ならん。天地の美、人性の徳、之れ神の賜にあらずや。一片の草花、愛し又愛して樂む可し。一片の幽情高念、養ふて又養ひ天に到らしむ可し。徳は自然なり。自然の徳に非んば俗情以て矯めたる也。自然の徳は神只之を教ふ。天地人性の美妙を以て教ふ。(前篇)

□人間は神を愛する外立つ能はず。人間は神が命じ給ふ義務に従ひて極力之に斃るゝ外希望あらず。(同)

□自由の在る處憂なく惑なく失望なし。(同)

□神は自由の父なり。爾束縛を感ずるあらば直ちに省みよ。必ず神を離れて小我を狭む處あるを見出すべし。(同)

□此世は實の世にして決して夢の世に非ず。神は存在す。(同)

□人情はワン、自然はワン、神はワン也。(同)

□神の道は鳥の跡を尋ぬる如く難し。(病床録)

□禱の文句は極めて簡易なれど、禱の心は難し、得難し。(同)

□行へば則ち平安の神われと共にあり。心境、心術、心氣、皆熟練を以てなし得べく、事を爲すの力をキリストより受くるの信仰あれ(前篇)

□神は人間を愛し賜ひ、人間は神を知り、神を信じて初めて希望あり、意味ある也。神は此人類を導かん爲めに英雄を下し給ふ。英

雄は人を支配し、人を導き、人を教ゆ。(同)

□哲人善士は必ず其信仰を有す。(後篇)

□宗教は個人感の絶頂也。天才は個人感の最強なる者なり。(前篇)

□信仰とは有様の世界を脱却して、無窮の希望と安心とに入るものなり。(後篇)

□眞の自由はたゞそれ信仰なり。(同)

□信仰、これ知識なり。何となれば信仰は心の光を意味し、心の光は則ち知識なれば也。(同)

□信仰は人心を放ちて自由を希望と満足と勇氣とに置く。(同)

□信仰心なき人心よ。汝は最も哀れむ可き者也。(前篇)

□宗教心なき人間は最も劣等なる人間なり。(同)

□嗚呼永遠無窮の自然、之に對する恐怖と悲哀とは唯だ信仰に由りて勝たるゝのみ。(同)

□信仰を信仰する勿れ、シンセリテイならざる信仰は死せる信仰なり。シンセリテイはアーネストなり。已に然り、怠慢放逸は不信仰を示す。言ひ換ゆれば信仰を信仰するなることを示す也。(同)

□ア、爾、事の成難きを悲しみ恨むこと勿れ、堅く信仰あれ、信仰は神の靈なり。(同)

□宇宙人生の秘義に警異して何等か自己以上の力を認めて之に頼らんと欲するは、即ち信仰を求むるの形なり。既に其力の存在を認めて之に頼るは即ち信仰也。而も世には生の荒涼を感ぜずして終る人あり。感ずるも求め得ずして終る人あり。感ずるが幸が、感

と得ざるが幸か、又感ずるも求め得ざるが幸か、這間の消息は竟に神秘なり。然れども感ずるも可、感ぜざるも可。感ずる人は感ぜざるを得ずして感ずる也。其感ぜざるを得ざる人々が感じて感ぜ得ざる人々を憐れみ、感ぜしめんとする其處に傳道ある所以也。

(病床録)

□靈の發達は人間の此地上生活の目的也。(後篇)

□人間の地上に於ける生活目的、神の光に歸する習練也。(同)

□此世は未來の用意なり。此世は靈魂の試験場なり。學校あり。練習場あり。(同)

□天地と人界と吾と、其中に限りなき神秘を藏す。宗教の眞理とは此三者の調和也。(同)

□上帝を信じ、其永遠と善と美を感じ能はざるは恥なり。人間の恥の最大なる者なり。(前篇)

□美や、神の光也。(後篇)

□美も善も眞も、神聖なくして其處に何の意味か存する。(前篇)

□上下し、左右し、發育し、死亡し、變轉し、推移し、潛伏し、煥發し、運行し、循環して窮りなき自然、我茲に在り、人間茲に生る。神聖を失ふて其處に何の希望、何の生命ある。(同)

□神聖なる法則は時間と空間とに經緯せられざる也。(後篇)

□人と雜談する時、神聖の世界、無極の生命を忘るゝ勿れ。(同)

□神の義と自由を求めて倦む事勿れ。(同)

獨歩の死生觀——三十章

□死とは自己を去る事なり。其處に残されたる問題あるなし。(病床録)

録)

□人の存する間、其人に死なし。(同)

□要するに總べての物は逝く也。(同)

□見よ、凡ては生きて死す。これ人の運命也。(欺かざるの記後篇)

□宇宙は活動する靈體也。人間は茲に生滅する肉體也。(同)

□生れしもの皆逝く、「生」の國民は死の國民也。(同)

□凡てのもの死す。而して天地に生命充つ。(同)

□過去に死あり、將來に死あり。吾が生は死の間にはさまる。(同)

□一度死んで見なければ眞の死を事實として取扱ふを得ず。(病床録)

□要するに古來幾多の死生觀は單に問題に過ぎざる可し。人を後にし事を先にし、總ゆる死に關する知識を綜合して死とは何ぞやと論じたる閑事業に過ぎざる可し。(同)

□人は多くその生涯中の大事を詩的ならしめんとするもの也。戀愛と死と此二つに於て殊に然り。されば世に眞にその戀を描ける者尠きが如く、その死際も又大に潤色せられ、詩化せられ、多くは甚しき改竄添削をば敢へてせらるゝ者也。(病床録)

□斷末魔にグット見得をなして倒るゝは役者の死態也。(同)

□人生唯一の驚愕は恐らく死の外になけん。(同)

- 人は生き得られざることを覺りながら、死其物に逢着するまでは尙生さんと欲す。(同)
- 未だ死と當面に相對せざる人は、嚴肅なる人生の大事實たる死を語る資格なき者なり。(同)
- 眼前に死の問題を控へながら、生き得らるゝ一分の望みあらば、人は到底自ら殺し得る者に非ず。(同)
- 不死とは人をごまかす信仰なり。人は互に食ふ動物の一種、品のよき虎、狼、蛇のみ。之れ形容に非ず、事實也。實際が證明し、歴史が證據立つる事實也。(後篇)
- 人間は天性死を恐る。蓋し動物的作用に過ぎず。(同)
- 己れの死を痛感する者は生を痛感す。生を痛感する者は死を痛感す。(欺かざるの記前篇)

- 生死を痛感するはシンセリテイの始めなり。(同)
- 大詩人、大豫言者、大哲人皆生死を痛感したる結果也。(同)
- 生にして空なりと知らば自殺すべし。是は最も自然的の行ひなり。決して前人の跡を見てあきらむるに及ばず。但し生の意に大信仰あらば決然其上に立つべし。また前人をまねるに不及。(後篇)
- 古來宗教家、死に處するの法を説くこと甚だ明瞭にして而も甚だ簡短なり。永世を信ずるに非らざれば即ち一切を併せて空寂に歸せしめんとするに過ぎず。渠等は過去と將來とを繋ぎて纔に現在の病苦より救はんとす、迂なり。(病床録)
- 死を死として説け、神も將來もなく、而かも尙現在より救へ、然

る時始めて渠等に權威あり。(同)

□死する者は箇々人々なり。複數なり。之を極めて明瞭簡單なる一繩に結びて救濟せんとす。固より其甲斐ある可からず。複數の主格に單數の客格を置かんとする、既に謬れり。(同)

□結果を死と豫期して尙ほ藥餌を與へて永く活かしむると、瞬間に自由を得せしめて長く此不安より免れしむると其慈悲果して幾何ぞ。これ考察すべき人道問題也。(同)

□疾病は彼岸に到達する階級のみ順序のみ。(同)

□疾病は死に對する營業視ならば好し。什麼なる苦痛、什麼なる惡戰にも猶忍ばん。されど死に對する所得稅、附加稅なりとせば人は什麼にすべき。(同)

□藥品を以て疾病を治せんとするは少くとも不自然なり。醫師よ、去つて鳥は如何にして癒え、魚は如何にして治するやを窮めよ。そこに必ず自然最良の方法あらん。學術は渠等を神に背かしめたり。(同)

□疾病は不自然也。人をこの地に置ける神本來の意志と矛盾す、杆格す、抵抗す。(同)

蘆花の死生観——二十章

- 光は實に生命なる哉。(自然と人生)
- 生は寄なり。死は歸なり。(寄生木)
- 生命ありて始めて生の樂しさを知る。(同)
- 死は單に此生態から彼の生態に移つたと云ふに過ぎぬ。(みずのはこと)
- 死は實に唯一の活路也。(不如歸)
- 死は或は自由なる可し。(同)
- 死は競争を取去る。(黒潮)

- 自殺は唯一歩の境だ。(思出の記)
- 自殺しなくても、天が玉の緒を絶ちたい時は絶つて呉れる。死ぬる迄は死なぬことだ。(寄生木)
- 生が盛れば死は退かねばならぬ。(みずのはこと)
- 人の一生は長い様で短く、短かい様で長い。(不如歸)
- 死んでも誰一人泣いて呉れる者もない位では生甲斐のないものだ。(同)
- 戦争は悲しむ可きもの。戦争は確かに人を眞面目ならしむ。(巡禮紀行)
- 死生の際は、人を眞に己に立返らしめずんば已まず。(同)
- 人の靈は恰も星の様で、此廣い宇宙の中で何千萬年に唯一度星と

行き逢ふことがあつて、其が一度行き逢ふと最早未來永劫またと逢ふことは出来ない。(青山白雲)

□我等凡夫は必ずしも人々盡く千里眼たることは出来ぬ。また必ずしも盡く千里眼たるを要せぬ。長尾郁子や千鶴子も評判が立つ間もなく死んで了ふた。不信が信を殺したとも云へる。また一方から云へば、幽明物心、死生、神人の間を隔つる神秘的一幕は容易に掲げぬ所に生活の面白味も自由もあつて、濫りに之を掲ぐるの報は、速かなる死、或は盲目である場合があるのではあるまいか。死を賭しても此帷幕の隙見すべく努力せずには居られぬ人を笑ふは吾儕が鈍なる高慢であらうか。同じ生類の進むにも、鳥の道、魚の道、蟲の道、また獸の道もあることを忘れてはならぬ。(みずのた

はこと)

□吾儕は奇蹟を驚異し、透視の人を尊敬し、而して自身は平坦な道を歩いて道の導く所に行きたい。(同)

□奇蹟は今も吾等の眼の前に行はる。(同)

□大疾よく體質を新にす。(不如歸)

□志士の魂は決して死なぬ。大人の靈は萬古に生きて居る。生きて萬々世の後までも挺然流俗の外に奮ふ靈魂を勵まし、言はずして而も相呼び應へて居る。(思出の記)

樗牛の死生觀——十三章

- わらゆる死は美はしきなり。(樗牛全集二卷)
- 情死は死によりて生を得るもの也。(同)
- 忠孝節義の死には自ら人を強ひ且つ人に逼るものあり。情死は尤も自由の死なり。(同)
- 愛を説くものは遂に情死に到らざるべからず。情死は此世に於ける最も大に且最も終りなる愛の發現なれば也。(同)
- 天下の最も怖るべきものは不能死の觀念に過ぐるなし。百年、千年、萬年、而して猶死する能はずして、長へに其の世界に生息せざるべからざるの運命を得たりとせよ、誰か慄然として寒心せざらむや。吾人は、人生の最も大いなる幸は、其の生命の不朽ならざる事に存す。(四卷)
- 生の覺悟は即ち死の覺悟也。哲學宗教は死の學問也。(同)
- 生死は常に處を異にし長へに接觸するの期無し。(同)
- 生者にして死を恐るゝは死者にして生を欲すると一般、能はざるを望むものに非ずや。(同)
- 怖るべきは死其物よりも、死を期待する心に存す。(同)
- 新しき聲の最早響かずなりたる時、人は死語の中より所謂る法則なるものを造り出だす。(同)
- 人は生きさんが爲めに生れ來りたる者に非ず。何ぞ必ずしも座して

自然の死を待つを要せむ。(三卷)

□ 噎死するものは食を恨むべからず。(四卷)

□ 病める者は醫師を見ざるも、薬によりて癒されむ。(三卷)

漱石の死生観——三十六章

□ 悲劇は喜劇より偉大である。之を説明して死は萬障を封ずるが故に偉大だと云ふものがある。取り返しか付かぬ運命の底に陥つて出て來ぬから偉大だと云ふのは流るゝ水が逝いて歸らぬ故に偉大だと云ふと一般である。運命は單に最終結を告ぐるが爲めにのみ偉大にはならぬ。忽然として生を變じて死となすが故に偉大なのである。忘れたる死を不用意の際に點出するから偉大なのである。巫山戯たるものが急に襟を正すから偉大なのである。人生の第一道義の必要を今更の如く感ずるから偉大なのである。人生の第一

義は道義にありとの命題を腦裏に樹立するが故に偉大なのである。道義の運行は悲劇に際會して始めて澁滞せざるが故に偉大なのである。道義の實踐はこれを人に望む事切なるにも拘らずわれの最も難しとする處である。悲劇は個人をして此實踐を敢てせしむるが爲めに偉大である。道義の實踐は他人に最も便宜にして自己に最も不利益である。人々力を茲に致すとき一般の幸福を促して社會を真正の文明に導くが故に悲劇は偉大である。(虞美人草)

□問題は無數にある。粟か米か、是は喜劇である。工か商か、是も喜劇である。あの女かこの女か、是も喜劇である。綴織か繻珍か、是も喜劇である。英語か獨逸語か、是も喜劇である。凡てが喜劇である。最後に一つの問題が残る。生か死か、是が悲劇である。(同)

□十年は三千六百日である。普通の人が朝から晩に至つて身心を勞する問題は皆喜劇である。三千六百日を通じて喜劇を演ずるものは遂に悲劇を忘れる。如何にして生を解釋せんかの問題に煩悶して死の一字を念頭に置かなくなる。この生とあの生との取捨に忙き故に生と死との最大問題を閑却する。(同)

□死を忘るゝものは贅澤になる。一浮も生中である、一沈も生中である。一舉手も一投足も悉く生中にあるが故に如何に躍るも如何に狂ふも如何に巫山戯るも大丈夫生中を出づる氣遣なしと思ふ。贅澤は高じて大膽となる。大膽は道義を蹂躪して大自在に跳梁する。(同)

□萬人は悉く生死の大問題より出立する。此問題を解決して死を捨

てると云ふ。生を好むと云ふ。是に於て萬人は生に向つて進んだ。唯死を捨てるると云ふに於て萬人は一致するが故に、死を捨てるべき必要の條件たる道義を相互に守るべく默契した。去れども萬人は日に日に生に向つて進むが故に、日に日に死に背いて遠ざかる故に、大自在に跳梁して毫も生中を脱するの虞なしとするが故に——道義は必要となる。(同)

□道義に重きを置かざる萬人は、道義を犠牲にしてあらゆる喜劇を演じて得意である。巫山戯る、騒ぐ、欺く、嘲弄する、馬鹿にする、踏む、蹴る、——悉く萬人が喜劇より受くる快樂である。此快樂は生に向つて進むに従つて分化發展するが故に——此快樂は道義を犠牲にして始めて享受し得るが故に——喜劇の進歩は底止す

る處を知らずして道義の觀念は日を追ふて下る。(同)

□『生れる時には誰も熟考して生れるものはありませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね』金を借りる時には何の氣なしに借りるが返す時にはみんな心配するのと同じ事さ『借りた金を返す事を考へないものは幸福である如く死ぬ事を苦にせんものは幸福さ』『死ぬのを苦にする様になつたのは神経衰弱と云ふ病氣が發明されてから以後の事さ』(吾輩は猫である)

□どうしても死な、けれでならん事が分明になつた時第二の問題が起る。どうせ死ぬならどうして死んだらよからう、是が第二の問題である。自殺クラブは此第二の問題と共に起るべき運命を有して居る。(同)

□死ぬ事は苦しい。然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神經衰弱の國民には生きて居る事が死よりも甚だしき苦痛である。従つて死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである。唯大抵のものは智恵が足りないから自然の儘に放擲して置くうちに世間がいじめ殺してくれる。然し一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方に就いて種々考究の結果嶄新な名案を提出するに違ひない。だからして世界向後の趨勢は自殺者が増加して其自殺者が皆獨創的な方法を以つて此世を去るに違ひない。(同)

□萬年の後には死と云へば自殺より外に存在しないもの、様に考へ

られる様になる。さうなると自殺も大分研究が積んで立派な科學になつて中學校で倫理の代りに自殺學を正科として授ける様になる。其時分になると倫理の先生はかう云ふ。諸君、公德杯と云ふ野蠻の遺風を墨守してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己れの好む處は之を人に施して可なる譯だから自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。尤も昔と違つて今日は開明の時節であるから槍、薙刀もしくは飛道具の類を用ゐる様な卑怯な振舞をしてはなりません。唯わてこすりの高尚なる技術によつてからかひ殺すのが本人の功德にもなり又諸君の名譽にもなるのであります。……まだ面白い事がある。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目

的として居る。所が其時分になると巡査が犬殺しの様な根棒を以て天下の公民を撲殺してある。なぜつて今の人間は生命が大事だから警察で保護するんだが、其時分の國民は生きてるのが苦痛だから巡査が慈悲の爲めに打殺して呉れる。尤も少し氣の利いたものは大概自殺して仕舞ふから巡査に打殺される様な奴はよくよくの意氣地なしに自殺の能力のない白痴、もしくは不具者に限る。夫で殺されたい人間は門口へ張札をして置くのだ。唯殺されたい男ありとか女ありとか貼りつけて置けば巡査が都合のいい時に巡つて来てすぐ志望通り取計つてくれる。(同)

□『人間萬事夢の如しか、やれ〜』唯死といふ事丈が眞實だよ『死につき當らなくちや人間の浮氣は中々已まないものだ』(虞美人草)

□うつくしき人がうつくしき眠りに就いて其眠りからさめる暇もなく幻覺の儘で此世の呼吸を引取るときに枕元に病を護るわれ等の心は嘸つらいだらう。四苦八苦を百苦重ねて死ぬならば生甲斐のない本人は固より傍に見て居る親しい人も殺すが慈悲と諦められるかも知れない。——眠りながら冥府に連れて行かれるのは、死を覺悟をせぬうちに、だまし打ちに惜しき一命を果すと同様である。(草枕)

□絢爛の域を越えて平淡に入るは自然の順序である。我等は昔赤ん坊と呼ばれて赤いべいを着せられた。大抵のものは錦繪の中に生立つて四條派の淡彩から雲谷派墨繪に老いて遂に棺桶の果敢なきに親しむ。顧みると母がある。姉がある。菓子がある。鯉の幟が

ある。顧みる程華麗である。(虞美人草)

□過去の節穴を塞ぎかけたものは現在に満足する。現在が不景氣だと未來を製造する。(同)

□人の過去は人と犬と木と草との區別がつかぬ様になつて始めて眞の過去となる。戀々たる吾をつれなく見捨て去るそのかみに未練があればあるほど人も犬も木も草も滅茶苦茶になる。(同)

□逝く水は日毎を捨てざるを、徒らに眞と書き眞と書いて去る波の今書いた眞を今載せて杳然と去るを思はぬが世の常である。堂に法華と云ひ、石に佛足と云ひ、櫟に相輪と云ひ、院に淨土と云ふもたゞ名と年と歴史を記して吾事畢ると思ふは屍を抱いて活る人を髣髴する様なものである。見るは名あるが爲めではない。観ず

るは見るが爲めではない。太上は形をはなれて普遍の念に入る。

(同)

□過去は死んでゐる。大法鼓をならし、大法幢を樹て王城の鬼門を護りし昔は知らず、中堂に佛眠りて天盖に蜘蛛の絲ひく古伽藍を今更の様に桓武天皇の御宇から掘り起して無用の詮議に千古の泥を洗ひ落すは、一日に四十八時間の夜晝ある閑人の所爲である。

現在は刻をきざんで吾をまつ。有爲の天下は眼前に落ち来る。雙の腕は風を截つて乾坤に鳴る。(同)

□春秋に指を折り盡して白頭に呻吟する徒と雖も、一生を回顧して閱歷の波動を順次に點検し來るとき、嘗ては微光の臭骸に洩れて吾を忘れし拍手の興を喚び起す事が出來やう。出來ぬと云はゞ生

甲斐のない男である。(草枕)

□鏡に對ふときのみわが頭の白きを啣つものは幸の部に屬する人である。(同)

□静かなる事定つて静かなるうちにわが一脈の命を托すると知つた時、此大乾坤のいづくにか通ふわが血潮は、肅々と動くにも關らず音なくして寂定裏に形骸を土木視して、しかも依稀たる活氣を帶ぶ。生きてあらん程の自覺に生きて受くべき有耶無耶の累を捨てたるは、雲の岫を出で空の朝な夕なを變ると同じく、凡ての拘泥を超絶したる活氣である。古今來を空しうして東西位を盡したる世界の外なる世界に手足を踏み込んでこそ——それでなければ化石になりたい。赤も吸ひ、青も吸ひ、黄も紫も吸ひ盡して元の

五彩にかへす事を知らぬ真黒な化石になりたい。(虞美人草)

□死は萬事の終である。又萬事の始めである。時を積んで日となすとも、日を積んで月となすとも、月を積んで年となすとも詮ずるに凡てを積んで墓となすに過ぎぬ。墓の此方側なる凡てのいさくさは肉一重の垣に隔てられた因果に枯れ果てたる骸骨に入らぬ情の油を注して、要なき屍に長夜の踊ををどらしむるは滑稽である。還なる心を持てるものは還なる國をこそ慕へ。(同)

□もし死が可能であるならば、それは發作の絶高頂に達した一瞬にあるだらう。(それから)

□激するといふ心的状態は死に近づき得る自然の階段で激するたびに死に易くなるのは眼に見えてゐるから、時には好意でせめて其

近處まで押し寄せてみたいと思ふこともある。(同)

□死其物は洵に壯烈である。唯其死を促がすの動機に至つては解し難い。されども死其物の壯烈をだに體し得ざるものが如何にして藤村子の所作を喘ひ得べき。彼等は壯烈の最後を遂ぐるの情趣を味ひ得ざるが故に、たとひ正當の事情のもとにも到底壯烈の最後を遂げ得べからざる制限ある點に於て、藤村子よりは人格として劣等であるから喘ふ權利がない。(草枕)

□太平は死ななければ得られぬ。(吾輩は猫である)

□人間は健康にしる、病氣にしるどつちにしても脆いものである。(心)

□よくころりと死ぬ人がある、自然に。それからあつと思ふ間に死

ぬ人もある、不自然の暴力で。(同)

□自殺する人はみんな不自然な暴力を使ふのである。(同)

□樂しみのない者は自殺する氣遣はない。(虞美人草)

□樂しみの多いものは危い。(同)

□神は人間の苦しませに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。(吾輩は猫である)

□流れるもの程生きてるに苦は入らぬ。流れるものゝなかに魂まで流して居れば基督の御弟子になつたより難有い。成程此調子で考へると土左衛門は風流である。(草枕)

□人間は何時死ぬか分らないから何でも遣りたい事は生きてるうちに遣つておくに限る。(心)

□ものはさつさと片附けるに限る。夢の如しだつて懷手をしてゐちや駄目だ。(虞美人草)

□凡ての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果に外ならない。(吾輩は猫である)

□思ひ出の種に亡き人を偲ぶ形見とは、思ひ出す便を與へながら亡き人を故に返さぬ無慘なものである。(虞美人草)

漱石の藝術觀——五十二章

□文學は人生そのもの、大反射だ。文學の新氣運は日本全社會の活動に影響しなければならぬ。(三四郎)

□文藝は技術でもない。事務でもない。より多く人生の根本義に觸れた社會の原動力である。(同)

□善は行ひ難い。徳は施こしにくい。節操は守り安からぬ。義の爲めに命を捨つるのは惜しい。是等を敢へてするのは何人に取つても苦痛である。その苦痛を冒す爲めには苦痛に打ち勝つ丈の愉快がどこかに潜んで居らねばならぬ。畫と云ふも詩と云ふも、ある

は芝居と云ふも此悲惨のうちに籠る快感の別號に過ぎん。此趣きを解し得て始めて吾人の所作は壯烈にもなる。閑雅にもなる。凡ての困苦に打ち勝つて胸中一點の無上趣味を満足せしめたくなる。肉體の苦しみを度外に置いて、物質上の不便を物とも思はず勇猛精進の心を驅つて人道の爲めに鼎鑊に烹らるゝを面白く思ふ。若し人情なる狭き立脚地に立つて藝術の定義を下し得るとすれば、藝術はわれ等教育ある士人の胸裏に潜んで邪を避け正に就き曲を斥け直にくみし、弱きを扶け強きを挫かねばどうしても堪へられぬと云ふ一念の結晶で、燦として白日を射返すものである。

(草枕)

□智に働けば角が立つ、情に棹せば流される。意地を通せば窮屈だ。

兎角人の世は住みにくい。(同)

□住みにくさが高じると安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて畫が出来る。(同)

□人の世をつくつたものは神でもなければ鬼でもない。矢張り向ふ三軒兩隣りにちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう。

(同)

□越す事のならぬ世が住みにくければ住みにくい處をどれほどか寛容げて束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人と云ふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる

藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。

(同)

□住みにくい世から住みにくき煩ひを引き抜いた難有い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云へば寫さないでもよい。唯まのあたりに見ればそこに詩も生き歌も湧く。(同)

□文明の詩は金剛石より成る。紫より成る。薔薇の香と葡萄の酒と琥珀の盃より成る。冬は斑入の大理石を四角に組んで漆に似たる石炭に絹足袋の底を暖める所にある。夏は水盤に苺を盛つて甘き血をクリームの白きなかに溶かし込む所にある。あるときは熱帯の奇蘭を見よがしに匂はする温室にある。野路や空、月のなかな

る花野を惜氣もなく織り込んだ綴の丸帯にある。唐錦小袖振袖の擦れ違ふ處にある。——文明の詩は金にある。(虞美人草)

□詩の命は事實より確である。(同)

□葛湯を練る時、最初のうちはさら／＼して箸に手應へがないものだ。そこを辛抱すると漸く粘着が出て攪き滑せる手が少し重くなる。それでも構はず箸を休ませずに廻すと今度は廻し切れなくなる。仕舞には鍋の中の葛が求めぬに先方が少しづつ、動く様に附着してくる。詩を作るのは正に是だ。(草枕)

□普通の小説はみんな探偵が發明したものである。非人情な處がないから些とも趣がない。(同)

□小説は自然を彫琢する。自然其物は小説にはならぬ。(虞美人草)

□いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか自由だとか、浮世の觀工場にあるものだけで用を辨じて居る。(草枕)

□いくら詩的になつても地面の上を馳けあるいて錢の勘定を忘れるひまがない。(同)

□放心と無邪氣とは餘裕を示す。(同)

□餘裕は晝に於て、もしくは文章に於て必須の條件である。今代藝術の士を驅つて拘々として隨處に齷齪たらしむるにある。(同)

□三者の地位に立てばこそ芝居は觀て面白い。小説も見て面白い。芝居を見て面白い人も小説を読んで面白い人も、自己の利害を棚へ上げて居る。見たり讀んだりする間丈は詩人である。(同)

□間三尺も隔て、居れば落ち付いて見られる。あぶなげなしに見られる。言を換へて云へば利害に氣を奪はれないから全力を擧げて彼等の動作を藝術の方面から觀察する事が出来る。餘念もなく美か美でないかと鑑識する事が出来る。(同)

□怖いものは唯怖いもの其儘の姿と見れば詩になる。凄い事も己れを離れて唯單獨に凄いのだと思へば晝になる。失戀が藝術の題目となるも全くその通りである。失戀の苦みを忘れて其やさしい所やら同情の宿る處やら憂のこもる處やら、一步進めて云へば失戀

の苦しみ其物の溢るゝ所やらを單に客觀的に眼前に思ひ浮べるから文學美術の材料となる。(同)

□着想を紙に落さぬとも瓔鏤の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも五彩の絢爛は自から心に映る。唯おのが住む世をかく觀じ得て靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく無色の畫家には尺嫌なきも、かく人世を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱する點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利我慾の霸絆を掃蕩する點に於て、——千金の子よりも萬乘の君よりもあらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。(同)

□舌を頸頭に飛ばして泡吹く蟹と鳥鷺を争ふは策の最も凡なるものである。蜜を含んで針を吹き、酒を強ひて毒を盛るは策のまだ至らざるものである。最上の戦ひには一語も交ふる事を許さぬ、拈華の一撈は此を去る八千里ならざるも遂に不言として又不語である。唯躊躇する刹那なるに虚をうつ悪魔は思ふ壺に迷と書き、惑と書き、失はれたる人の子と書いてすはといふ間に引上げる。下界萬丈の鬼火に腥き青鱗の筆の穂に吹いて會釋もなく描き出せる文字は白髪をたわしにして洗つても容易く消えぬ。(虞美人草)

□肉を蔽へばうつくしきものが隠れる。かくさねば卑しくなる。今の世の裸體畫と云ふは唯かくさぬといふ卑しさに技巧を留めて居らぬ。衣を奪ひたる姿を其儘に寫す丈にては物足らぬと見えて飽